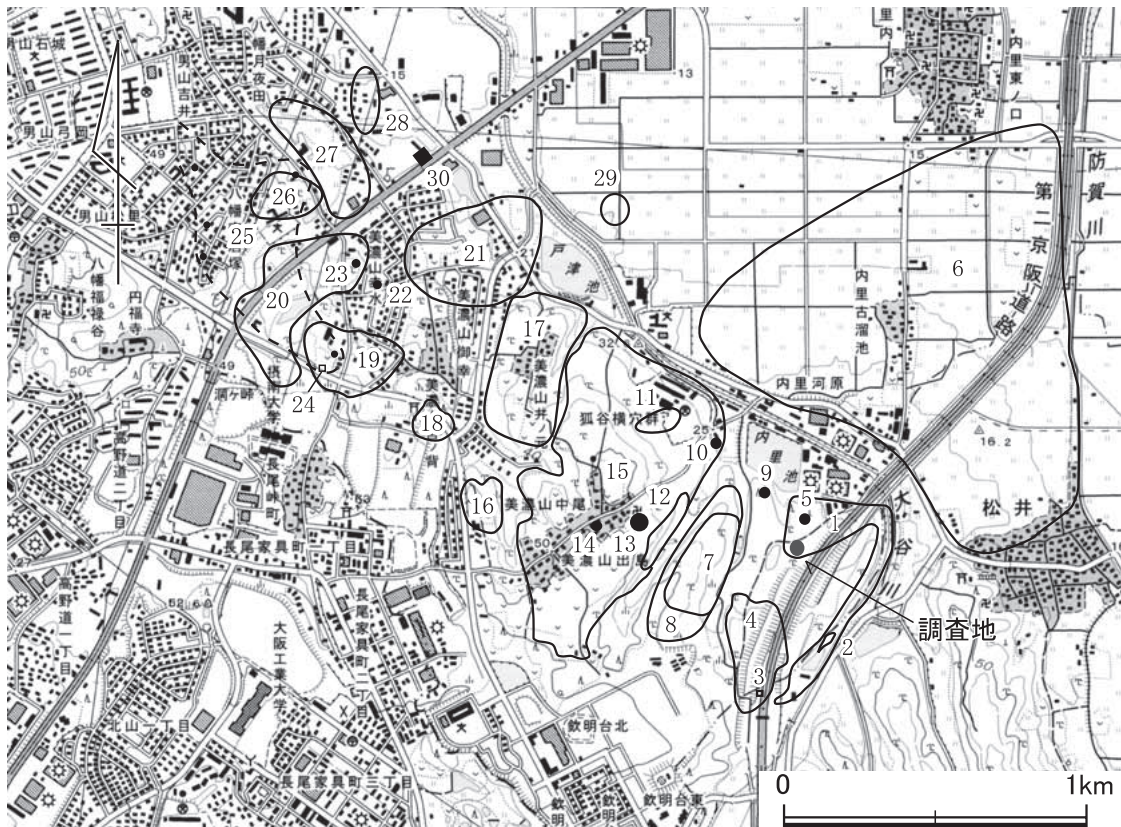


# 6.女谷・荒坂横穴群第11・12次 発掘調査報告

## 1. はじめに

今回の発掘調査は、平成21年度および平成22年度新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社（NE XCO西日本）関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、八幡市の南側、京田辺市との境界に近い丘陵地に位置する。付近には多くの横穴が分布しており、女谷・荒坂横穴群もその一つである。横穴は、丘陵斜面に横穴を掘り込んで作られた墓で、今回の調査地の東側では、第2京阪道の建設に伴う調査で、52基の横穴が検出されている<sup>(注1)</sup>。これらの横穴は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて造られている。数基の横穴からは人骨が出土している。また、鉄地金銅張の胡籙金具も出土している。これまで、女谷地区ではA～Cの3か所の支



- |             |           |               |          |
|-------------|-----------|---------------|----------|
| 1 女谷・荒坂横穴群  | 9 内里池南古墳  | 17 金右衛門垣内遺跡   | 25 南山古墳群 |
| 2 御毛通遺跡     | 10 柿谷古墳   | 18 宮ノ背遺跡      | 26 南山遺跡  |
| 3 御毛通古墳     | 11 狐谷横穴群  | 19 西ノ口遺跡      | 27 山田遺跡  |
| 4 荒坂遺跡      | 12 美濃山横穴群 | 20 備前遺跡       | 28 山田東遺跡 |
| 5 荒坂古墳      | 13 王塚古墳   | 21 幸水遺跡       | 29 五反田遺跡 |
| 6 新田遺跡      | 14 小塚古墳   | 22 東二子塚古墳     | 30 ヒル塚古墳 |
| 7 美濃山廃寺     | 15 美濃山遺跡  | 23 西二子塚古墳     |          |
| 8 美濃山廃寺下層遺跡 | 16 宮ノ背西遺跡 | 24 西山廃寺（足立寺跡） |          |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

群が確認されており、今回検出した横穴群は女谷D支群となる。

今回の調査では、京都府教育委員会や八幡市教育委員会、地元美濃山、内里地区のそれぞれの自治会などにご協力いただいた。また、現地調査にあたっては、各大学の学生諸君や地元有志の方々の参加があった。感謝したい。

(引原茂治)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 第11次調査 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

次席総括調査員 伊野近富

主任調査員 引原茂治

主査調査員 柴 暁彦

同 調査員 松尾史子

第12次調査 課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

主任調査員 引原茂治

同 調査員 松尾史子

調査場所 八幡市美濃山荒坂65-2

現地調査期間 第11次調査 平成21年7月9日～平成22年2月25日

第12次調査 平成22年5月13日～6月11日

調査面積 第11次調査 2,000㎡

第12次調査 400㎡

## 2. 位置と環境

女谷・荒坂横穴群の所在する八幡市は、京都府南部の山城盆地西部に位置する。市の西側には、大阪府との境となる男山丘陵、美濃山丘陵が南北に横たわる。東及び北側には、木津川が湾曲して流れる。この美濃山丘陵の南東側斜面に女谷・荒坂横穴群は営まれている。

八幡市における旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した金右衛門垣内遺跡や荒坂遺跡、宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、金衛門垣内遺跡や晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。

弥生時代以降は、遺跡の確認例が増える。弥生時代中期では、集落跡として内里八丁遺跡、金衛門垣内遺跡、方形周溝墓群として幸水遺跡がある。弥生時代後期では、幣原遺跡、西ノ口遺跡、宮ノ背遺跡、中の山遺跡、木津川河床遺跡、内里八丁遺跡などがある。

古墳時代前期から中期にかけては、男山丘陵周辺に、石不動古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの前方後円墳、前方後方墳が築造される。また、ヒル塚古墳は一辺52mで、粘土槨を主体部とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する。女谷・荒坂横穴群の付近に位置する美濃山王塚古墳は、最近の調査で、葺石や埴輪をもつ、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された前方

後円墳であることが判明した。このほか、柿谷古墳などが、付近に位置する。後期には、横穴墓が美濃山丘陵を中心に多数営まれる。女谷・荒坂横穴群や狐谷横穴群などである。

志水廃寺、西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯跡が確認され、7世紀後半から末頃の創建と考えられている。奈良時代に創建された美濃山廃寺では、建物跡や溝などが検出され、奈良三彩壺片などが出土している。集落跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、女郎花遺跡などがある。内里八丁遺跡では、瓦や墨書土器などが出土しており、その性格が注目される。また、中国唐時代の絞胎陶枕片なども出土しており、遺跡の性格を考える上で示唆的である。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯がある。また、平安時代には、木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。

中世の遺跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上津屋遺跡などがある。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。

(引原茂治)

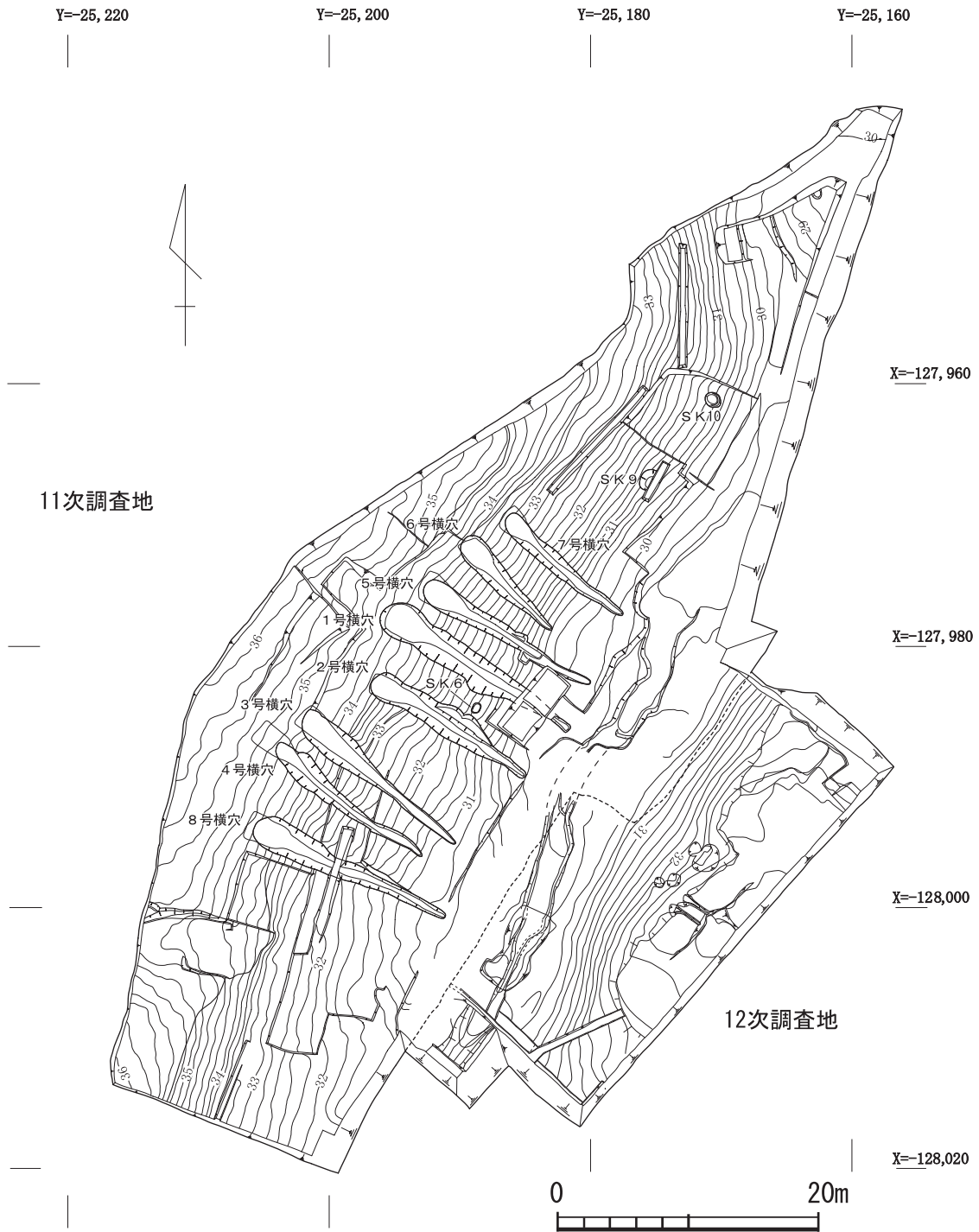
### 3. 調査の経過

第11次調査は、平成21年7月9日から開始した。この調査地は、南西から北東に延びる丘陵の南東側斜面に位置しており、一帯は竹林となっている。調査では、平成20年度の調査で確認した



第2図 女谷・荒坂横穴群支群配置図

1号横穴、2号横穴の調査およびその周辺部における横穴の有無の確認を行った。周辺部の確認調査では、さらに3基の横穴(3～5号横穴)を確認した。これらの横穴の調査を行うためには竹林を広範囲に伐採する必要があるため、その準備等のため、9月10日に、一旦、調査を中断した。以上の調査については、すでに報告している。<sup>(注2)</sup>



第3図 女谷・荒坂横穴群第11・12次調査遺構配置図

10月27日から調査を再開し、横穴の掘削を順次行なった。また、さらに3基の横穴(6～8号横穴)を確認し、これらの横穴についても、順次調査を行なった。この間、平成22年1月30日に現地説明会を実施した。168名の方々が参加された。第11次調査は、平成22年2月25日に終了した。

検出した横穴は計8基で、北東方向に開く谷の北西斜面に築かれており、いずれも南東方向に開口する。横穴は谷の入り口付近にはなく、中央付近にまとまって分布する。なお、横穴の番号は検出した順番につけている。北東の7号横穴から南西の8号横穴までは30mを測り、各横穴の間隔は、2号と3号横穴の間が4mと広く、1号と5号・3号と4号の間が1mと狭い。横穴は、谷底から少し高い位置から掘削されており、1・2・5～7号横穴は標高30m付近、3・4・8号横穴は標高31m前後である。このことから横穴群は、1・2・5～7号横穴と3・4・8号横穴の2つのグループに分けられる可能性がある。

第11次調査で横穴群を検出した斜面と谷を挟んで相対する斜面部にも横穴が存在する可能性があるため、平成22年度に第12次調査として確認調査を実施した。調査は、平成22年5月13日から開始した。調査の結果、横穴は存在しないことが判明した。横穴群内の通路となっていた可能性がある谷底部を確認して、6月11日に現地調査を終了した。

(引原茂治)

#### 4. 調査内容

##### 1) 1号横穴

##### ①形態と規模

南東方向に開口するD支群中最長の横穴である。全長17.2m、玄室長3.5m、玄室最大幅2.5m、墓道長13.7m、墓道の上幅2m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。横穴の主軸はN58°Wで、羨道の有無は不明である。玄室床面は1面のみで、標高は31.9mである。奥壁は床面から0.5mより上の部分は大きく崩落している。天井はほとんど崩落していた。

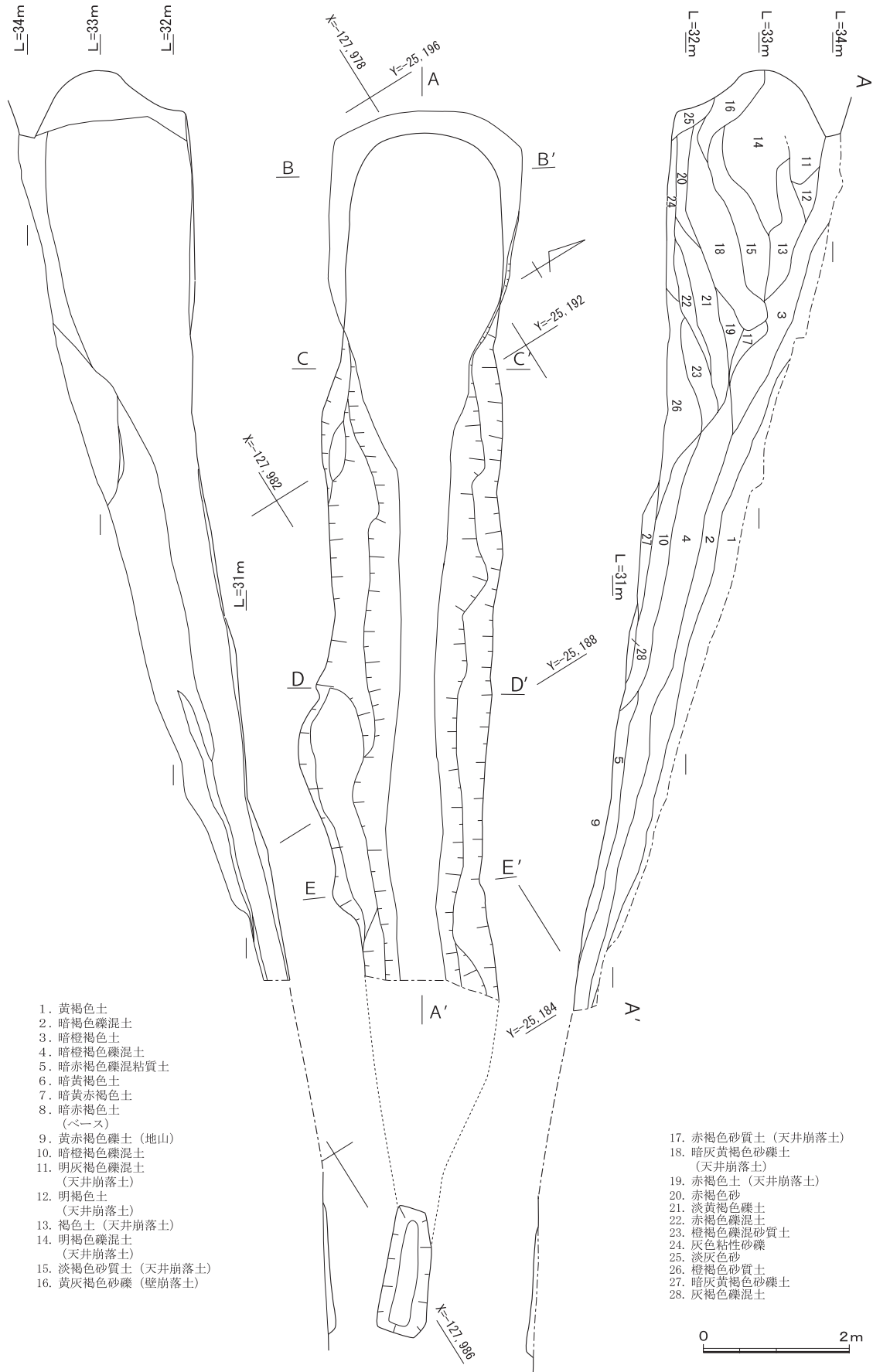
##### ②土層堆積状況

玄室内は天井や壁の崩落土である明褐色系礫混土または赤褐色系土で埋まっており、墓道の埋土は暗褐色系礫混土(4・10・5層)であった。天井崩落後に表土化した2・3層が堆積していることから、墓道は入り口封鎖後もオープンであったのではないかと考えられる。

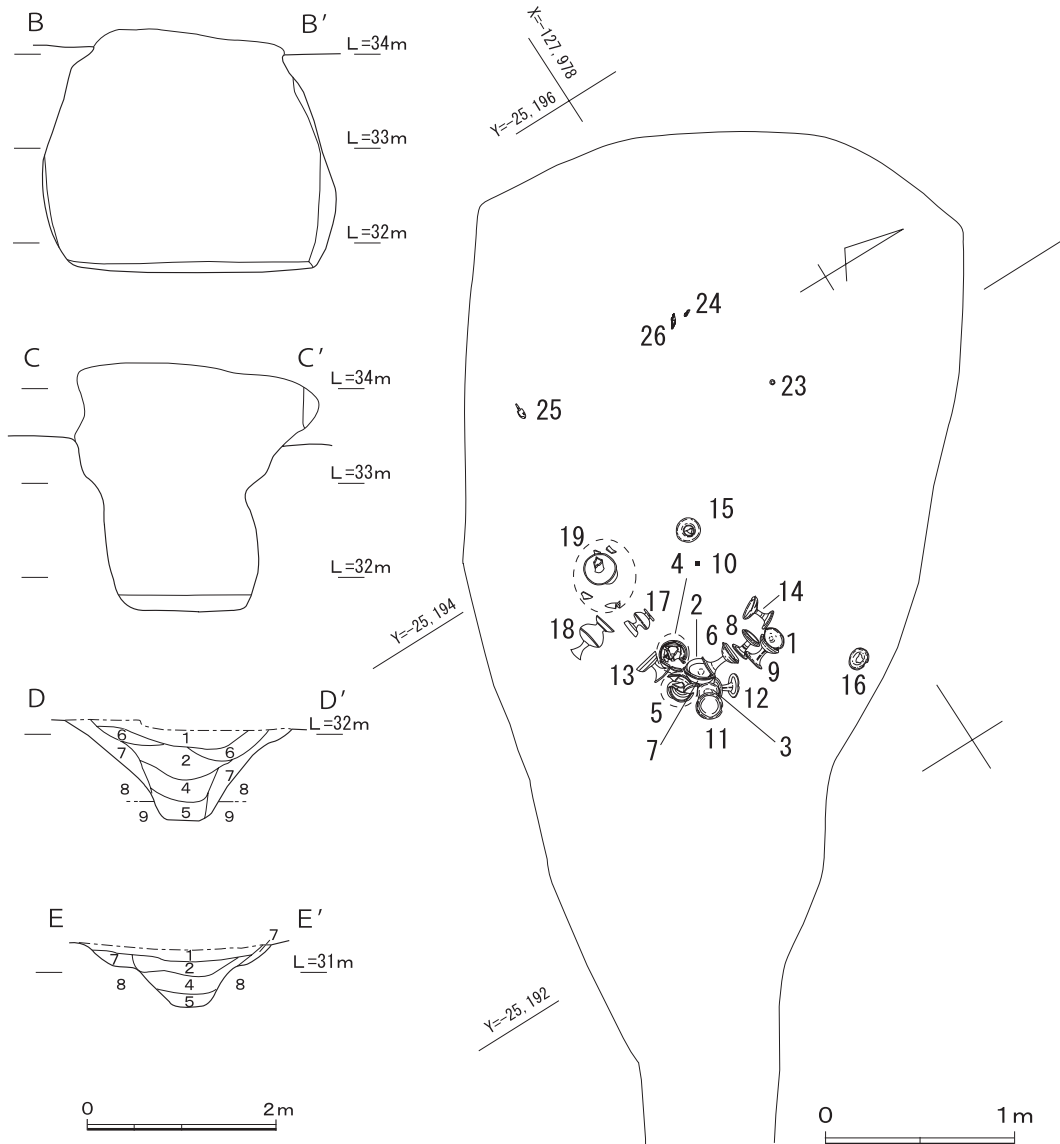
##### ③遺物出土状況

玄室内からは須恵器高杯10点、蓋3点、台付長頸壺2点、台付甗1点、金環2点、鉄鏃2点、刀子片1点が出土した。鉄鏃(25)は玄室中央の右側壁寄り、鉄鏃(26)と刀子(24)は金環(23)と同じく玄室中央付近で出土した。もう1点の金環は玄室精査中に出土した。須恵器は、玄室の入り口付近で様々な方向に倒れた状態でまとまって出土した。台付長頸壺(19)は直立した状態で出土しており、口縁部のみが破損していた。人骨や棺材は出土していない。

また、墓道掘削中に土師器(20・21)や横穴より新しい時期の須恵器片22などがわずかに出土した。



第4図 1号横穴実測図

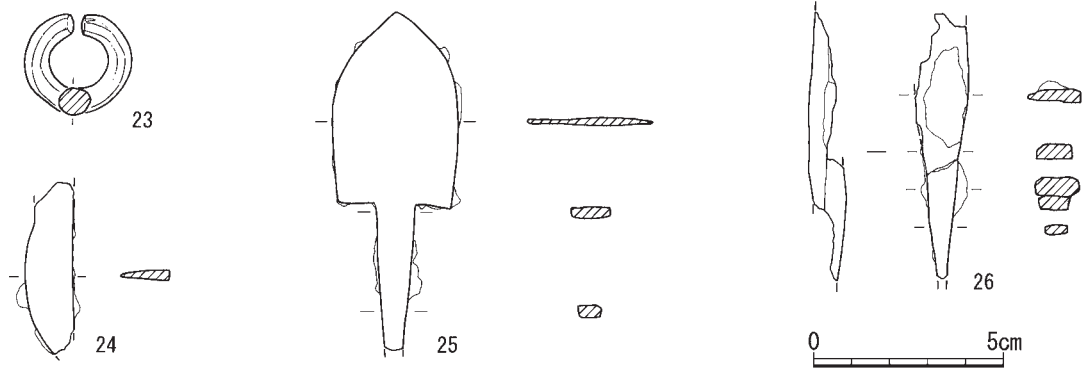
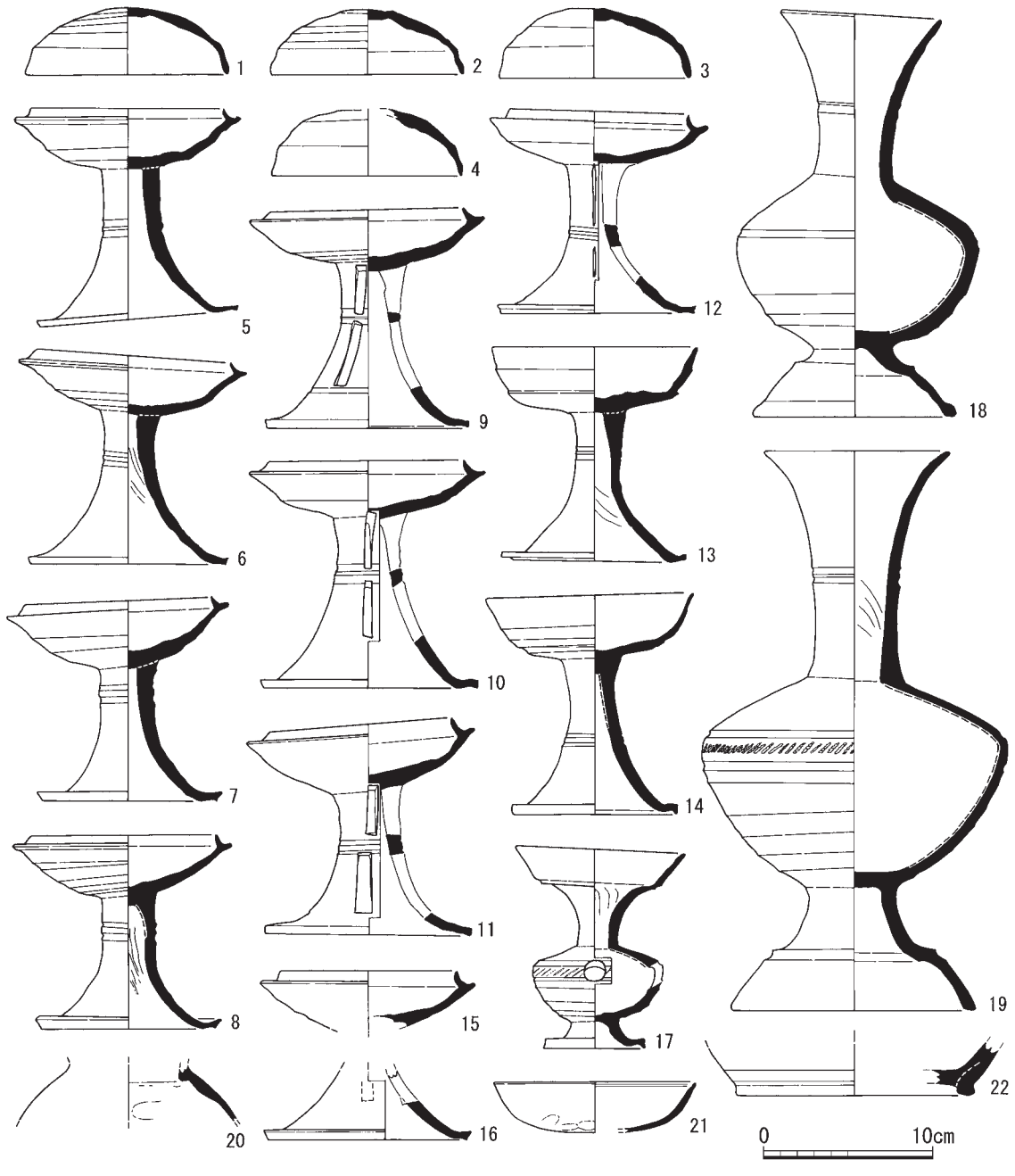


第5図 1号横穴立面図及び遺物出土状況図(土色は第4図に同じ)

④出土遺物

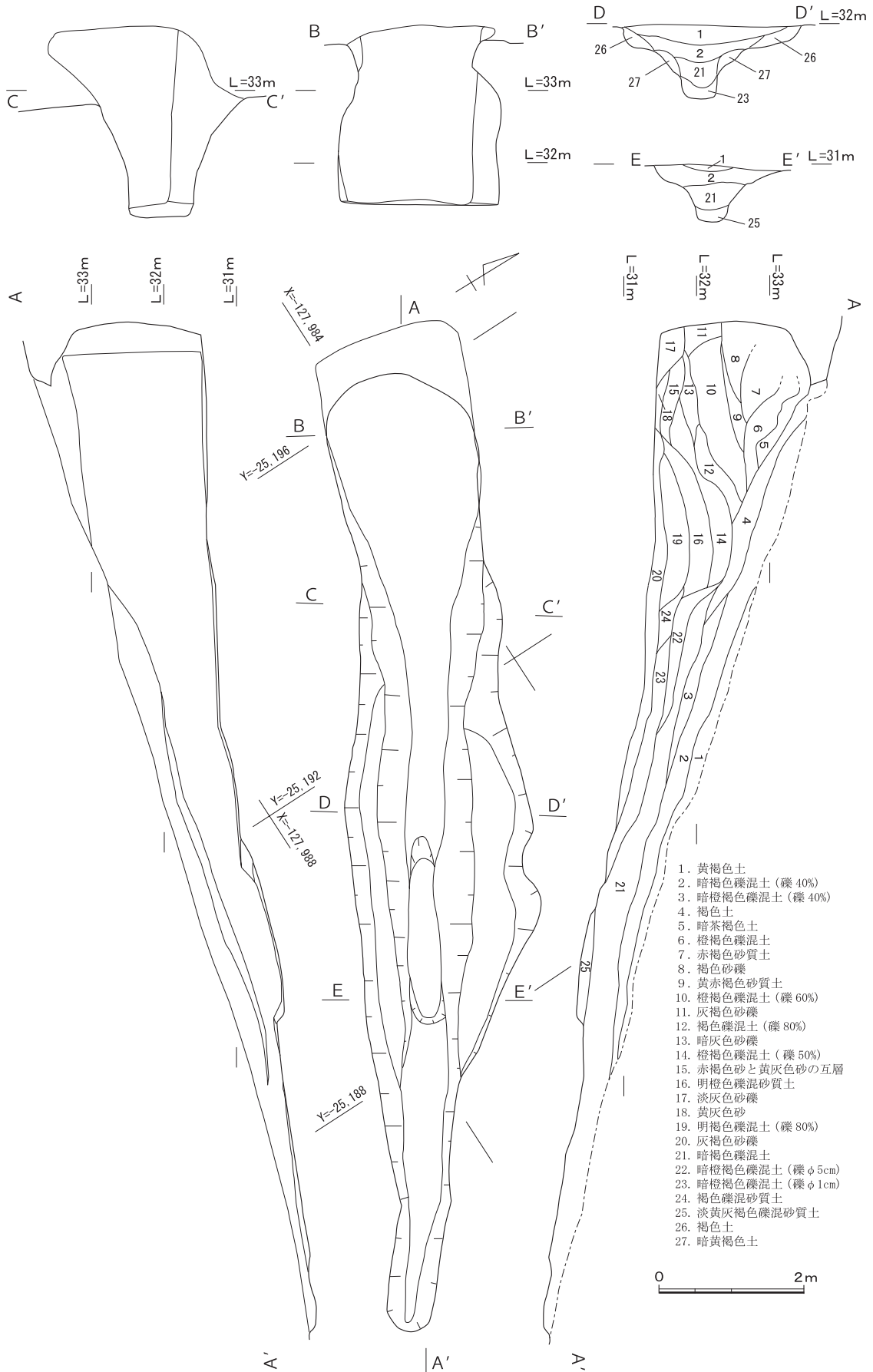
1～19・23～26は玄室内から出土した。1～4は須恵器杯蓋で、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。16は高杯の脚、5～12・15は有蓋高杯、13・14は無蓋高杯である。9～11の脚部には方形2段透かしを施す。12の脚部には切り込み状の2段透かしが施されている。5～8・13・14は透かしを施さず、2条の沈線を施す。17は台付礎である。これらは概ねTK209～217型式の資料と考えられる。

23は金環である。断面形は楕円形で長径8mm、短径7mmを測る。緑青が進行しており鍍金はわずかに認められる程度である。金環は2点出土したが、もう1点は剥離した金メッキの部分のみであり、図示できなかった。24は鉄製品である。長さ4.5cm、幅1.3cmで、断面形から刀子と考えられる。25・26は鉄鏃である。25は平根系の鏃で、全長9cm、身部は幅3.3cm、厚さ2mm、頸部は幅1cm、厚さ2mmで断面形は長方形である。木質等の付着はみられない。26は全体形は不明であるが、断面の形状から鉄鏃と考えられる。身部については不明である。頸部は幅



第6図 1号横穴出土遺物実測図





0.6～1 cm、厚さ2～3 mmで断面形は長方形である。図示したように途中で折れて食い違いに接合した状態で錆が進行している。木質等の付着はみられない。

20～22は墓道掘削中に出土した。20は土師器の壺か甕の頸部である。頸部径7 cm、残存高3.4 cmである。墓道先端部付近の上層の埋土(第4図第2層)から出土した。21は土師器杯である。口径11.8 cm、器高3.0 cmを測る。墓道先端付近の検出面で出土した。22は奈良～平安時代の須恵器壺の底部である。墓道の埋土の最上層(黄褐色土)から出土した。

(松尾史子)

## 2) 2号横穴

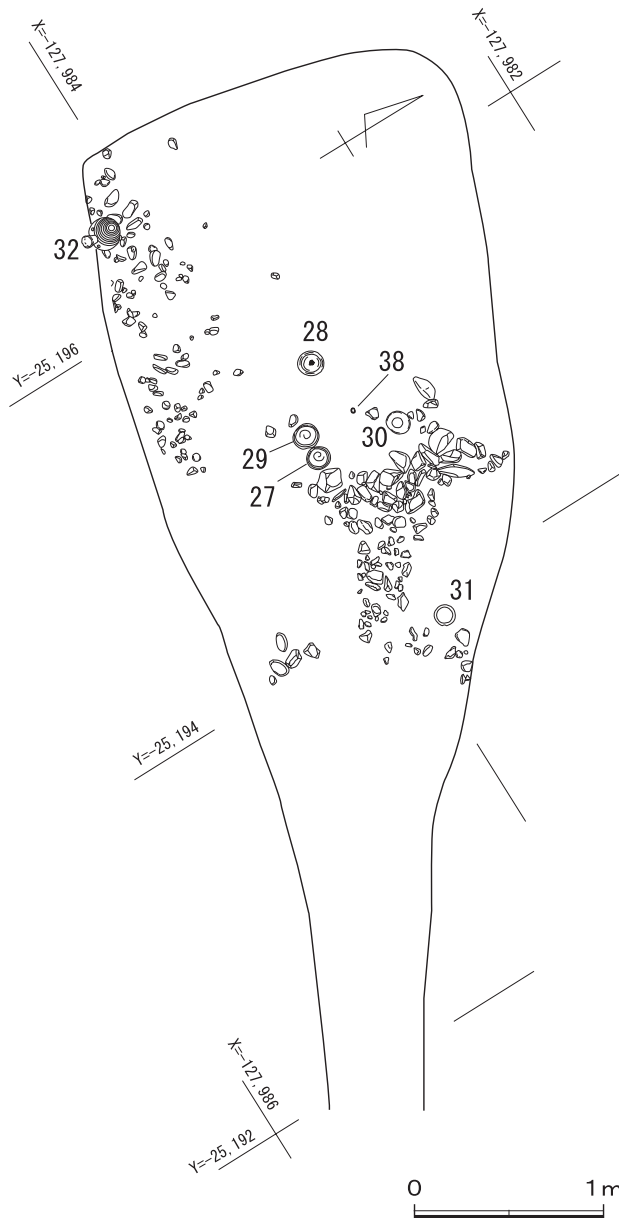
### ① 規模と形態

1号横穴の西側に隣接する南東方向に開口する横穴である。全長13.8 m、玄室長2.1 m、玄室最

大幅2 m、墓道長11.7 m、墓道の上幅2 m、下幅0.5 mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄室は墓道に対して大きく南に屈曲する。玄室の主軸はN58° Wで、墓道的主軸はN56° Wである。玄室床面の標高は31.5 mである。玄室床面は入口付近のみ礫敷が施されていたようである。羨道の有無は不明である。

### ② 土層堆積状況

1～4層は天井崩落後に堆積した土層である。14・16・19層は玄門付近に山状に堆積しており、天井崩落土と考えられる。玄室内は天井や壁の崩落土(赤褐色系礫混土)で埋まっていた。1～4層を掘削後、墓道内では21層が幅0.5 m、長さ8.5 m以上にわたって溝状に確認できた。この層からは須恵器がまとまって出土しており、横穴を再利用した際に掻き出された可能性が考えられる。過去の調査成果においても同様の遺物出土状況がみられ、それらを墓道内通路出土遺物と評価している。今回も同様に評価しておきたい。また、1・2層の堆積状況からSX1と同様、墓道は入り口封鎖後ある程度オープンであったと考えられる。



第8図 2号横穴遺物出土状況図

また、墓道中央には長さ2.6m、幅0.4m、深さ0.2mの土坑が掘削されており、墓道の床面と同じ高さまで淡黄灰褐色礫混砂質土(25層)で埋められていた。過去の調査例と同じく水抜き用の施設と考えておきたい。

### ③遺物出土状況

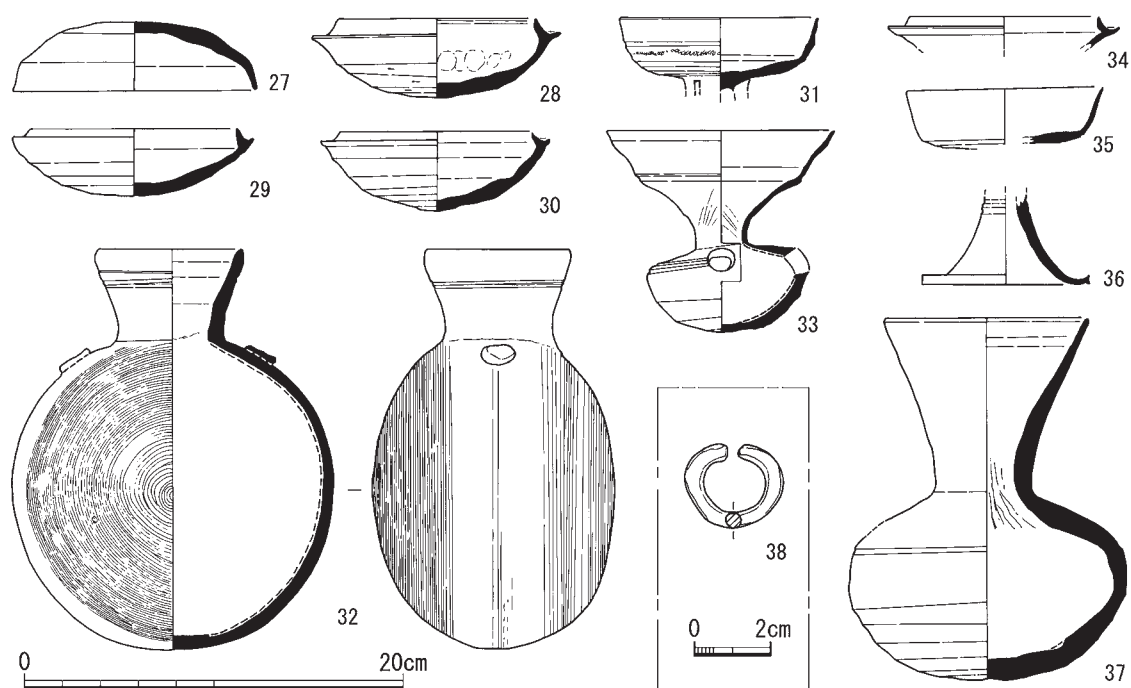
玄室内からは、金環(38)や須恵器の提瓶(32)、杯身(28~30)、杯蓋(27)、高杯(31)が出土した。提瓶は、玄室奥壁寄りの右側壁に立てかけられたような状態で出土した。杯身は、玄室中央付近で30が正位で、28は逆位で出土した。金環は30と28の中間で出土した。高杯は玄室の入り口付近で出土しており、脚部は欠損していた。人骨や鉄器、棺材は出土しなかった。

また、前述のように墓道の埋土からは須恵器がまとまって出土した。須恵器は墓道中央付近から先端付近まで広範囲に分布しており、破片化している率が高いことから追葬、もしくは再利用の時に、玄室内にあったものが掻き出されたと考えられる。

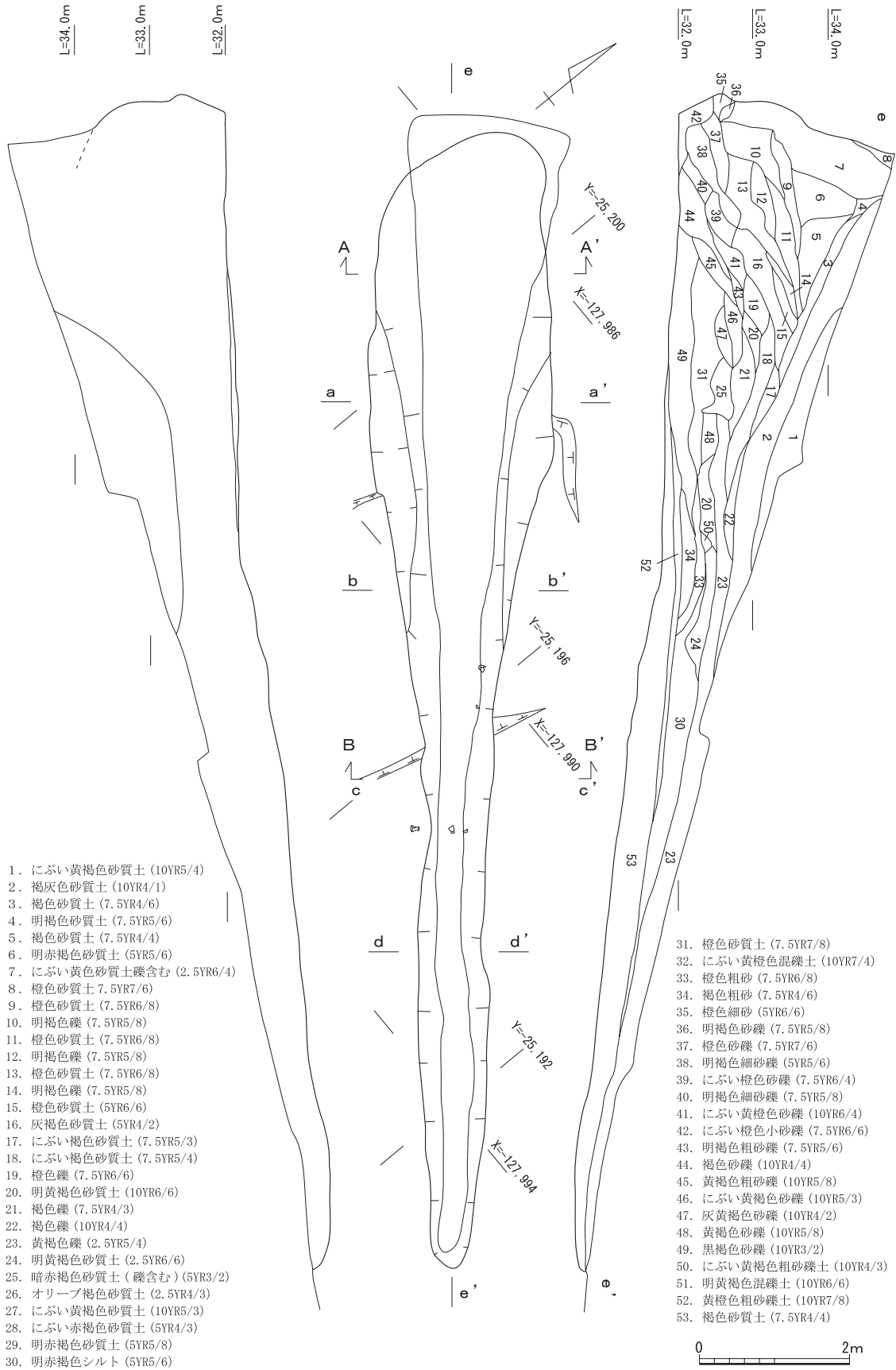
### ④出土遺物

27~32は、玄室内から出土した。27は須恵器杯蓋で、口径12.9cm、器高3.7cmである。28~30は須恵器杯身である。口径10~10.3cm、器高3.5~4.2cmを測り、小振りで深みがある。28・30は体部下半の外面に削りを施す。31は須恵器高杯の杯部である。口径10.4cm、残存高3.9cmである。わずかに脚部の透かしの痕跡が残る。墓道出土資料と接合関係を確認したが、接合するものはなかった。32は須恵器提瓶である。口径7.4cm、体部径17cm、器高21.2cmである。体部にはカキ目が施され、片面に「×」のヘラ記号が認められる。把手は形骸化しており、肩部に円形の粘土板を貼り付けているのみである。これらはTK209~217型式段階の資料と考えられる。

38は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で、長径4mm、短径3mmである。鍍金はほとん



第9図 2号横穴出土遺物実測図



第10図 3号横穴実測図

ど剥落しており、鍍金がわずかに残っている程度である。

33～37は墓道内通路の埋土から出土した。34は須恵器杯身である。口径10cm、残存高1.7cmを測る。35は須恵器高杯の杯部、36は須恵器高杯の脚部である。両者に接点はないが、同一個体の可能性がある。35は口径10.3cm、残存高3.1cmで墓道の先端付近で出土した。36は底径8.9cm、残存高4.8cmを測る。33は須恵器甕である。口径11.4cm、器高10.9cmである。37は須恵器長頸壺である。口径10.6cm、器高19.2cmを測る。墓道内でかなり広範囲に破片が分布していたが、ほぼ完形に復原できた。これらは玄室内の遺物とほとんど時期差はない。

(松尾史子)

### 3) 3号横穴

#### ①形態と規模

3号横穴は、2号横穴の南東側に位置する。玄室の平面形は、撥形を呈する。天井部は、崩落のため、ほとんど残存していないが、奥壁の状況から、奥壁付近での天井の高さは1.7m前後と考えられる。玄室床面は1面で、ほぼ平坦である。墓道部分は緩く傾斜して下降する。玄室と墓道の境界は、平面的には明確でない。天井部崩落土の状況から、奥壁から3.6m付近までが玄室と考えられる。玄室の閉塞状況は不明である。

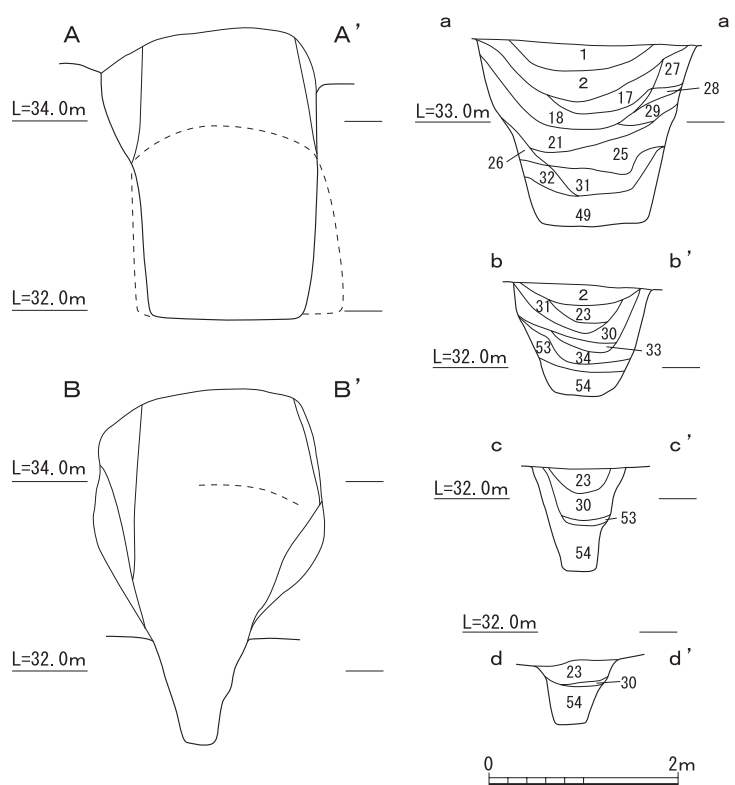
この横穴の規模は、全長15.3m、玄室長3.6m、玄室幅2.2m、墓道長11.7m、墓道最大上幅1.4mを測る。主軸はN56°Wである。

#### ②土層堆積状況

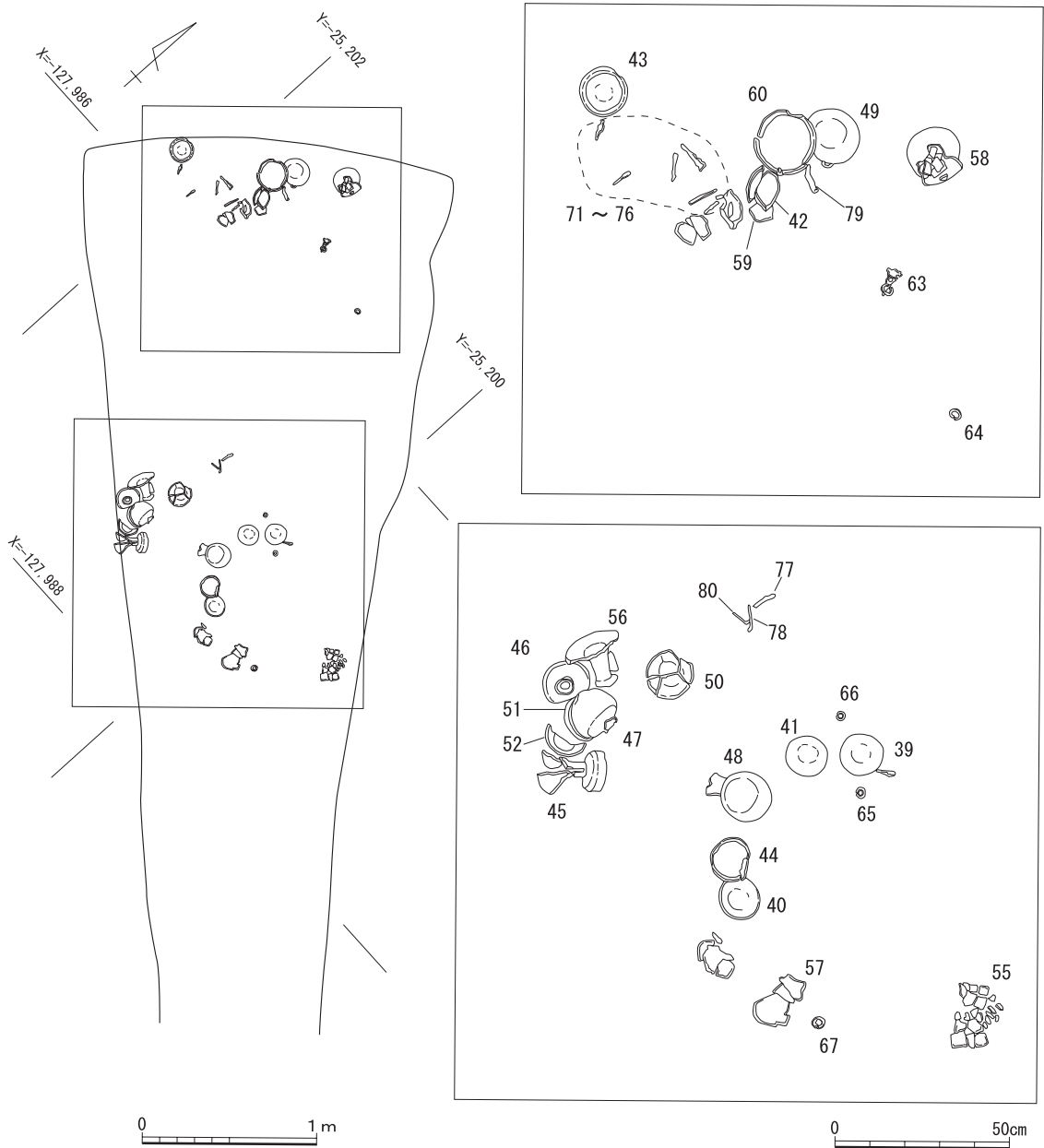
1～5層は、横穴の天井部等が崩落した後に堆積した褐色系の砂質土である。その下層は、天井部や奥壁・側壁部の崩落土と考えられる。地山の大阪層群に由来する砂礫が大半である。玄室床面は、地山の大阪層群である。

#### ③遺物出土状況

遺物は、おもに玄室床面から出土している。玄室内では、奥壁付近と玄門付近の、およそ2か所に集中して出土している。奥壁付近からは、須恵器杯身(42・43)、須恵器提瓶(49)、土師器杯(59)、土師器甕(58)、土師器鉢(60)、耳環(63・64)、馬



第11図 3号横穴立面図及び土層実測図(土色は第10図に同じ)

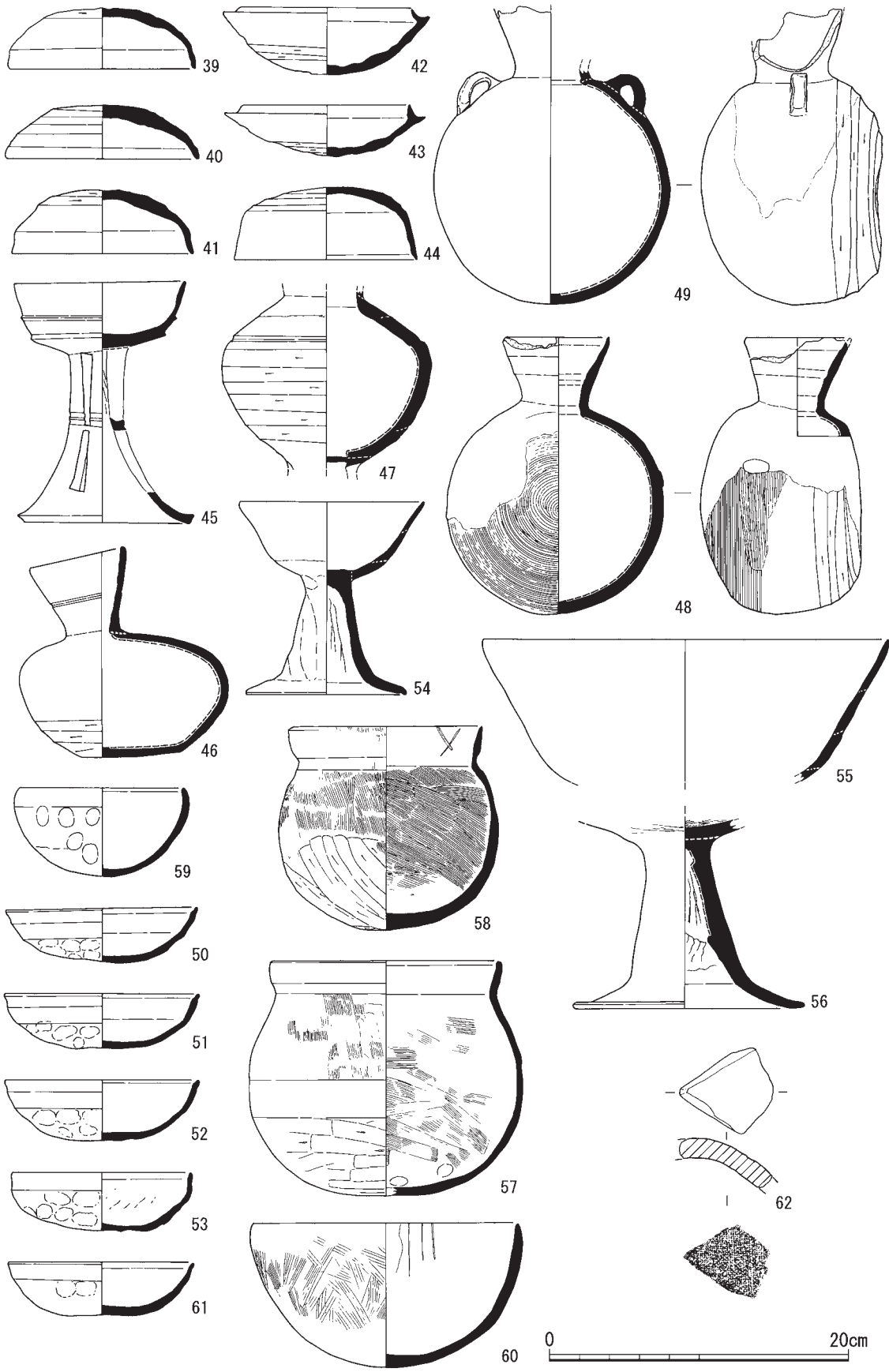


第12図 3号横穴遺物出土状況図

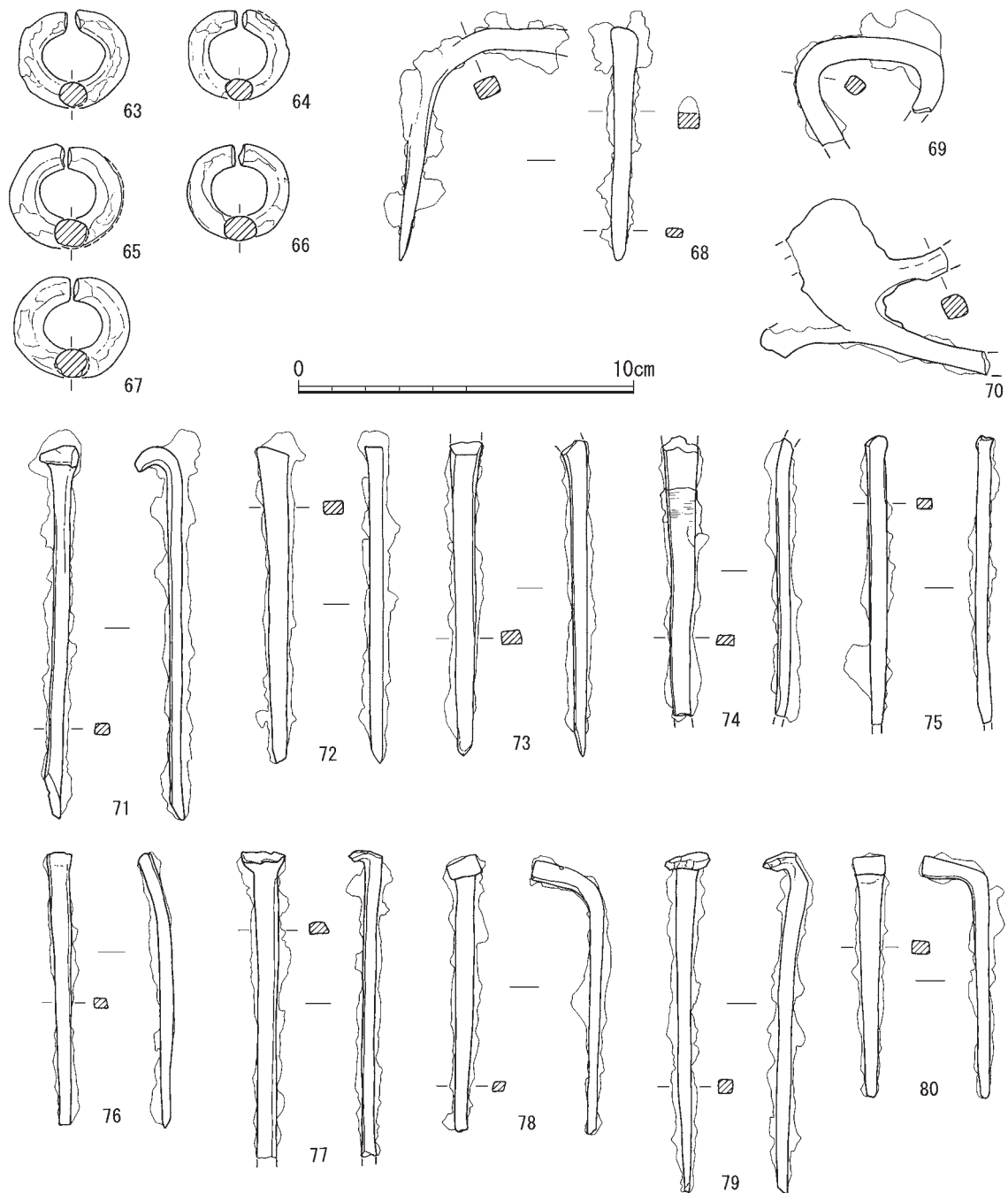
具と考えられる鉄製品(68~70)、ほか鉄釘が出土している。玄門付近からは、杯蓋(39~41)、高杯(45)、壺蓋(44)、台付壺(47)、平瓶(46)、提瓶(48)などの須恵器や、杯(50~53)、高杯(54~56)、甕(57)などの土師器、耳環(65~67)、ほか鉄釘などが出土している。また、墓道埋土から土師器杯(61)が出土している。また、玄室埋土から布目瓦片(62)が出土している。

#### ④出土遺物

須恵器杯身(42・43)は、口径が11.2~11.4cmで、口縁部の立ち上がりは低い。TK209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器提瓶(49)は、頸部が斜め上方に立ち上がり、端部は打ち欠かされている。環状の吊手を持つ。土師器杯(59)は、半球状の形状で、外面にユビオサエがみられる。土師器甕(58)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。口縁部



第13図 3号横穴出土遺物実測図(1)



第14図 3号横穴出土遺物実測図(2)

内面に「×」状のヘラ描きがある。土師器鉢(60)は、半球状の形状で、外面ハケメ調整である。口縁部内面に4条のヘラ描きがある。以上の土器は、玄室奥壁付近から出土した。

須恵器杯蓋(39~41)は口径12~12.8cmで、天井部が丸味を持つものと台形状を呈するものがある。TK217型式でも古い様相を示すものとみられる。須恵器蓋(44)は、口縁部が長めに垂下しており、壺蓋とみられる。須恵器高杯(45)は、脚部2段透かしで、3方向に透かしを持つ無蓋高杯である。須恵器平瓶(46)は、頸部外面に沈線を施す。須恵器台付壺(47)は、頸部と脚部を欠く。副葬時に故意に欠いた可能性も考えられる。須恵器提瓶(48)は、頸部が斜め上方に立ち上がり、



端部は丸くおわる。吊手の痕跡はない。土師器杯(50~52)は、浅目で、口縁端部が段状になる。土師器杯(53)は、浅目で、口縁端部が直立して立ち上がる。土師器高杯(54)は、磨滅のため、調整は不明である。土師器(55・56)は同一固体と考えられ、大型の高杯とみられる。土師器甕(57)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。以上の土器は、玄室玄門付近から出土した。

土師器杯(61)は、浅目で、口縁端部は外反気味に丸くおわる。墓道から出土した。布目瓦片(62)は、丸瓦とみられる。玄室埋土から出土した。

耳環(63・64)は銀環とみられる。玄室奥壁付近から出土した。耳環(65・66)は金環とみられる。耳環(67)は表面の残りが悪い。これら3点は、玄室玄門付近から出土した。鉄製品(68)は、「U」字形を呈するものとみられ、馬具の鐙の一部か。鉄製品(69)は、環状を呈するものとみられ、馬具のバックルの一部か。鉄製品(70)は、形状不明であるが、轡等の一部か。以上3点の鉄製品は、玄室奥壁付近から出土した。鉄釘(71~80)は、棺に用いられていたものか。

(引原茂治)

#### 4) 4号横穴

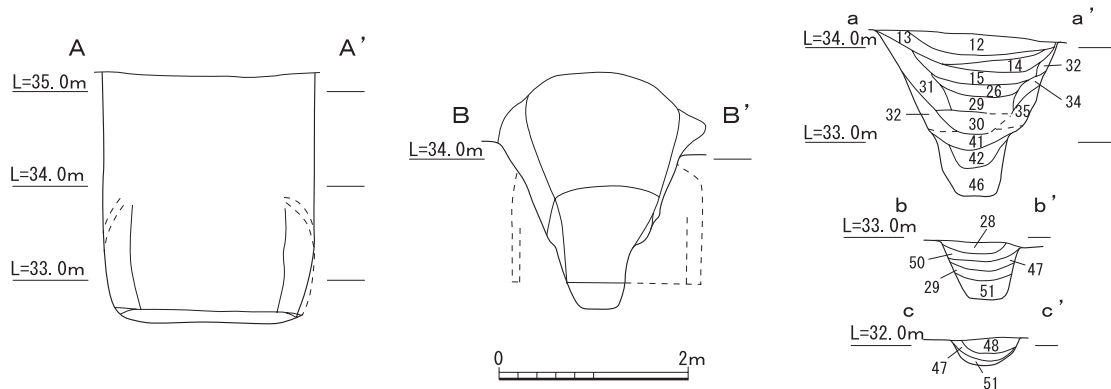
##### ①形態と規模

3号横穴の南東側に位置する。玄室平面形は、羽子板形を呈する。玄室奥壁部から1.9mにわたって天井部が残存している。ただ、玄室床面からの高さは1.2mであり、本来の高さを保っていない可能性がある。玄門は、床面の平面形のくびれなどから、奥壁から3.5m付近と考えられる。玄室床面は、若干の盛土を敷いてほぼ平坦に仕上げる。墓道は、緩く傾斜して下降する。閉塞の状況は不明である。

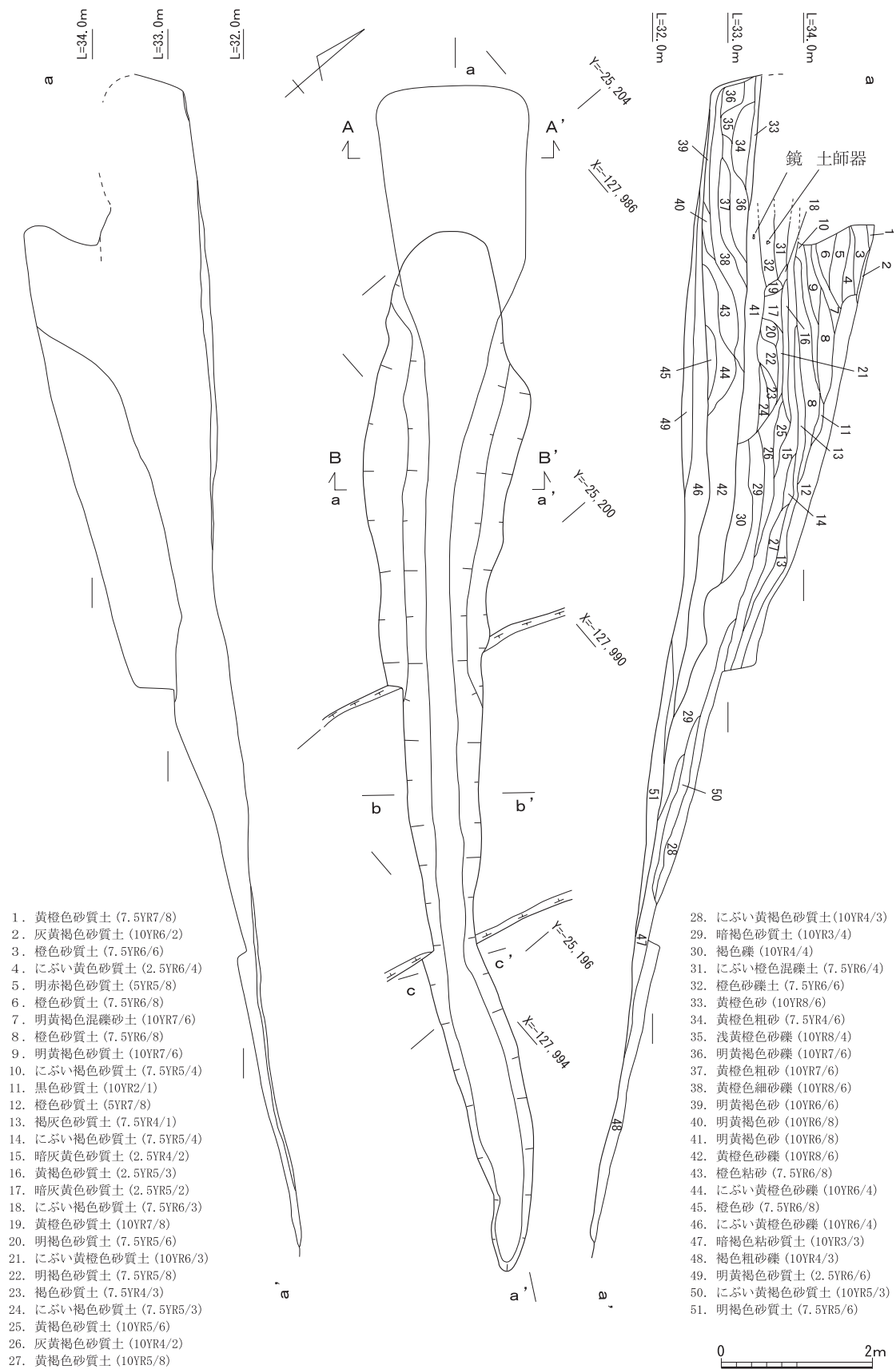
この横穴の規模は、全長15.7m、玄室長3.5m、玄室幅2m、墓道長12.2m、墓道最大上幅1.9mを測る。主軸はN49°Wである。

##### ②土層堆積状況

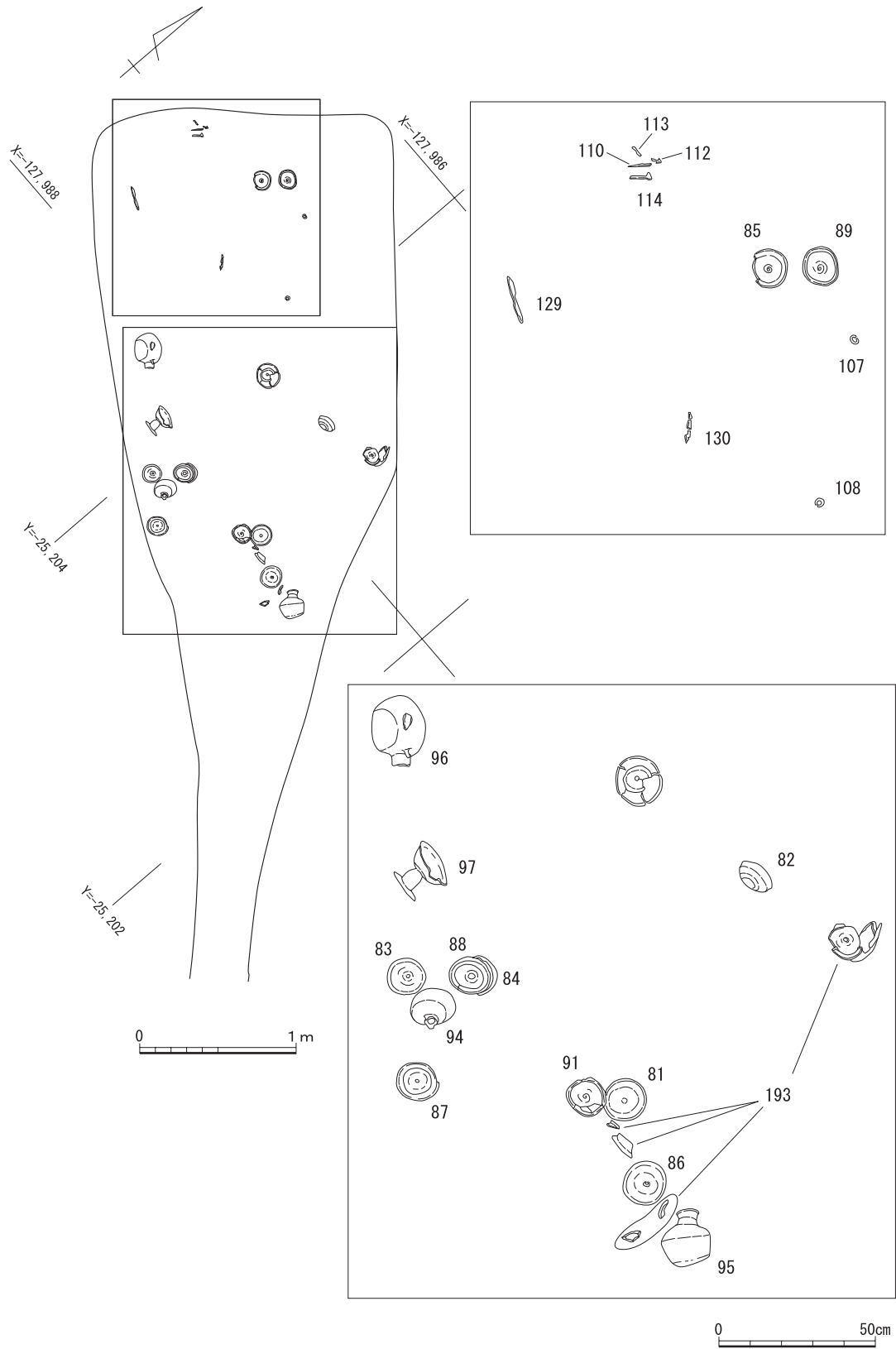
1~29層・47・48・50層は、横穴の天井部等が崩落した後に堆積した砂質土である。この横穴は、9世紀頃に再利用されており、30~33層・41層は、再利用後に堆積した天井部等の崩落土と



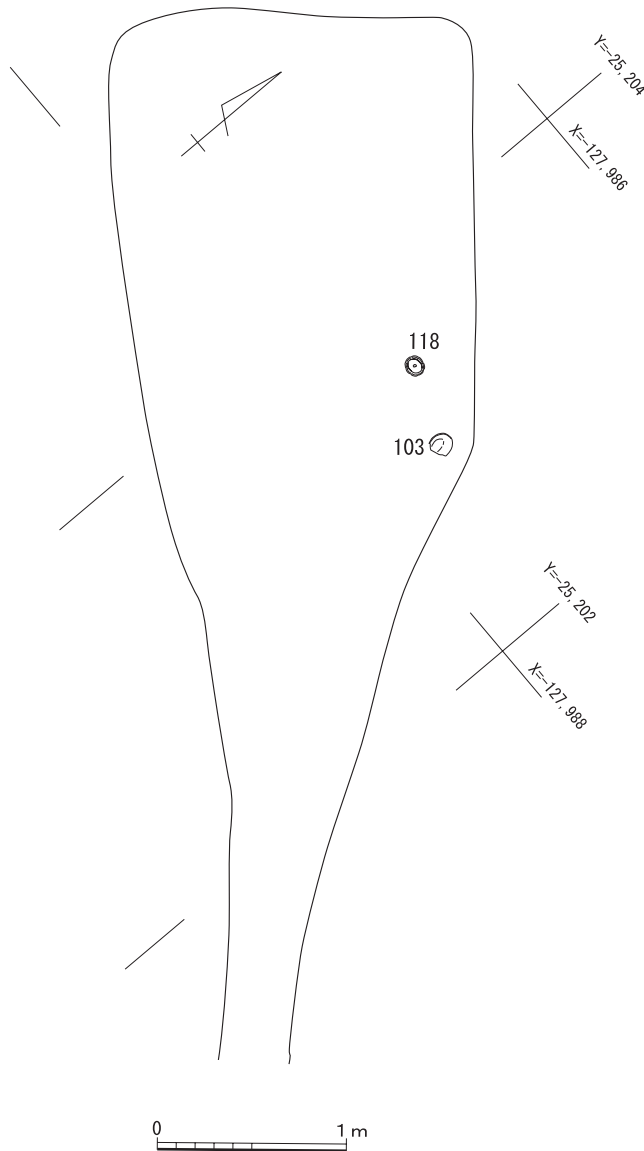
第15図 4号横穴立面図及び土層実測図(土色は第16図に同じ)



第16図 4号横穴実測図



第17図 4号横穴遺物出土状況図(1)



第18図 4号横穴遺物出土状況図(2)

みられる砂礫層である。34～40層・42～45層は、9世紀以前の天井部崩落土と考えられる砂礫層で、これらの層上をほぼ平坦に削平して再利用している築造当初の床面から0.6m前後の高さである。46・49・51層は、横穴築造時に地山の大阪層群の上に床面を整えるために敷かれたと考えられる砂礫や砂質土である。

### ③遺物出土状況

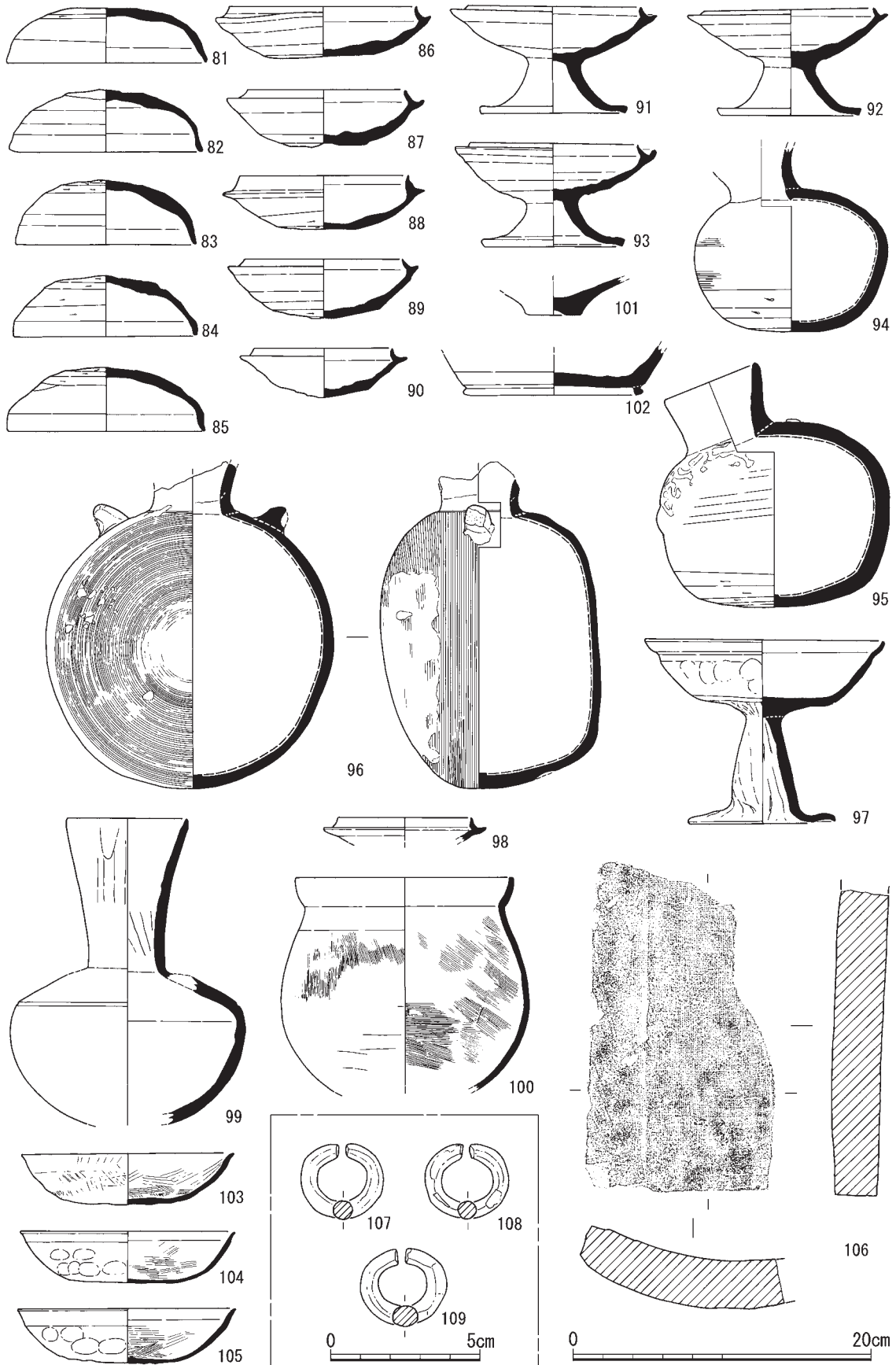
横穴に伴うとみられる遺物は、おもに玄室床面のほぼ全面にわたって散乱する様相である。須恵器が多く、土師器は、高杯(97)と甕(100)である。玄門から奥壁に向かって左側の側壁に沿って須恵器提瓶(96)や須恵器平瓶(94)、土師器高杯(97)などが配されている様子がうかがえる。玄室奥半部からは、耳環(107・108)や鉄鏃(110～113)、刀子(115～117)が出土している。墓道埋土からは、須恵器杯身片(98)が出土している。

再利用面上からは銅鏡(118)や土師器杯(103～105)が出土している。銅鏡(118)は、鏡背を上にした状態で出土した。このほか、玄室埋土から布目瓦片(106)や

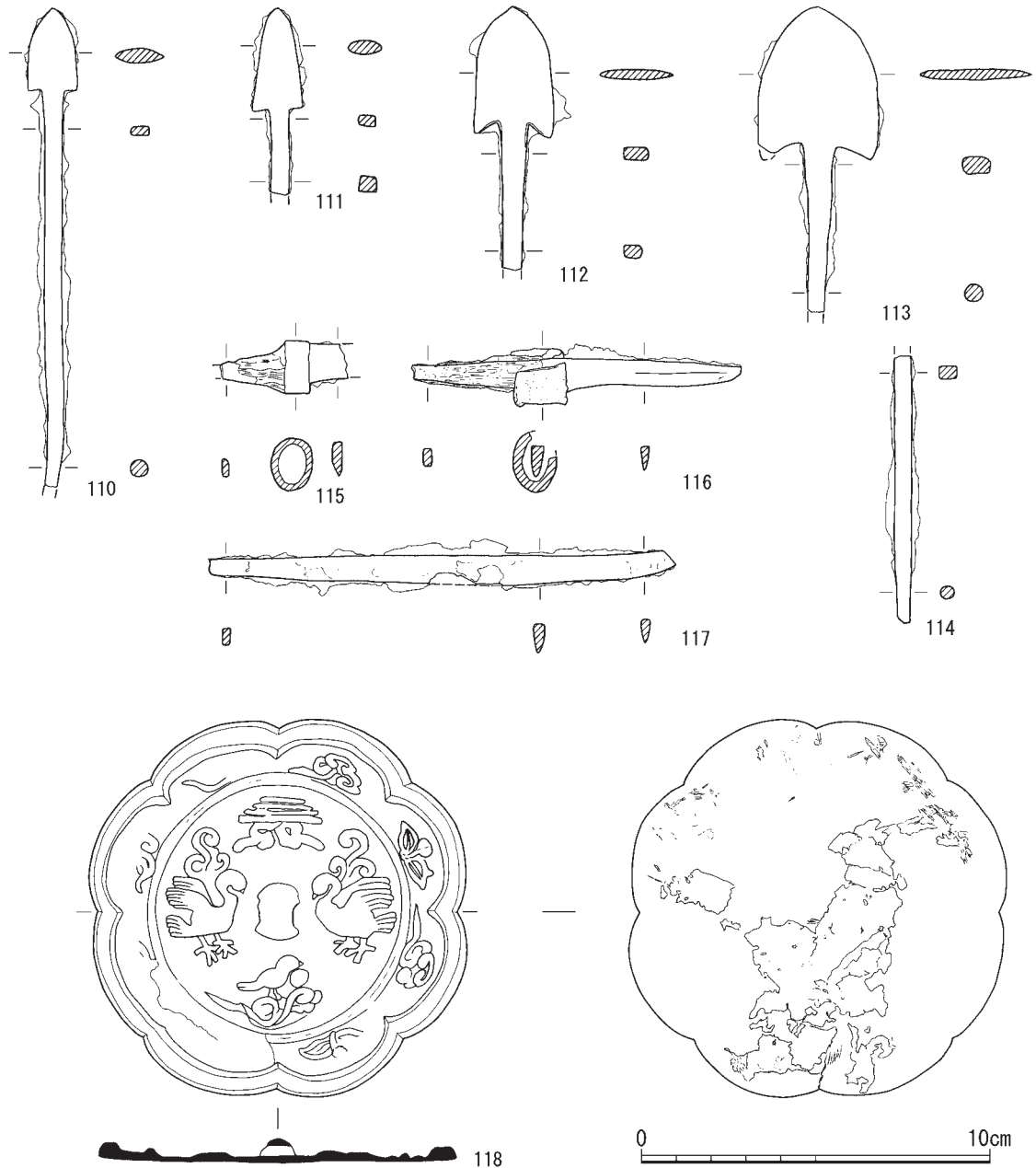
須恵器杯片(102)、弥生土器壺底部片(101)などが出土している。

### ④出土遺物

須恵器杯蓋(81)は、口径13.4cmを測り、やや扁平気味の器形である。TK209型式とみられる。須恵器杯蓋(82～85)は、口径11.9～13.1cmで、天井部が丸味を持つものと台形状と呈するものがある。TK217型式でも古い様相を示すものとみられる。須恵器杯身(86・88)は、口径11.3～12.5cmを測り、扁平気味の器形を呈する。TK209型式でも古い様相を呈するものとみられる。須恵器杯身(87・89)は、口径10.6cmで、TK209型式とみられる。須恵器高杯(91～93)は、透かしのない短脚付の有蓋高杯である。須恵器平瓶(94)は、体部にカキ目調整がみられる。須恵器平瓶(95)は、体部上面に1個の小円板状浮文を貼りつける。須恵器提瓶(96)は、肩部に形骸化した吊手を持つ。土師器高杯(97)は、杯部径に較べてやや細めの脚部を持つ。以上の土器は、玄室から出土した。



第19図 4号横穴出土遺物実測図(1)



第20図 4号横穴出土遺物実測図(2)

須恵器杯身(90)は、口径9.2cmで、TK217型式併行期のものとみられる。玄室埋土出土であり、確実にこの横穴に伴う遺物とは判断できない。須恵器杯身片(98)は、小形のもので、墓道埋土から出土した。須恵器長頸壺(99)は、焼成が軟である。墓道埋土から出土した。土師器甕(100)は、頸部があまりくびれず、口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸くおわる。体部外面上半がハケメ調整、下半がヘラケズリである。内面はハケメ調整である。須恵器片(102)は、杯ないしは壺の一部とみられる。9世紀頃のものか。横穴埋土から出土した。弥生土器(101)は、弥生時代後期の壺底部とみられる。玄室埋土から出土した。

土師器杯(103~105)は、再利用面上から出土した。内面ハケメ調整で、口縁端部は外反気味になる。布目瓦片(106)は、須恵質で、上面に布目、下面は縄目タタキのちナデ調整である。再利

用面上の埋土から出土した。

耳環(107・108・109)は、銀環である。鉄鏃(110～113)、刀子(115～117)は、玄室奥半部から出土した。

銅鏡(118)は、床面から0.6m前後高い位置にある再利用面上から出土した。直径11.2cm、厚さ0.1～0.7cmを測る。八花形をしており、鏡背の内区には向かい合う2羽の鳥や雲模様を鋳出す。外区には雲文と花文を交互に配するが、湯まわりが悪かったのか、ほぼ半周分文様が鋳出されていない。この鏡は「瑞雲双鸞八花鏡」と呼ばれる。鏡面には紙の痕跡があり、紙に包んで埋納されたものとみられる。

(引原茂治)

## 5) 5号横穴

### ①形態と規模

1号横穴の北東に隣接し、D支群中では中規模の横穴である。玄室は全体が杓文字形を呈する。天井部は奥壁から0.4m付近までは残存するが、その他の箇所では崩落していた。玄室の床面は1面で、ほぼ水平に作る。玄室の幅の狭まり及び土層断面の観察から、玄門部は奥壁から3.6mの位置と判断される。羨道の有無や閉塞の状況は不明である。玄門部付近および墓道の床面は谷底に向かって徐々に傾斜する。

各部長は次の通りである。全長15.2m、玄室長3.6m、玄室幅は奥壁部が最大で2.5m、玄門幅が0.87m、墓道長11.6m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN57°Wである。

### ②土層堆積状況

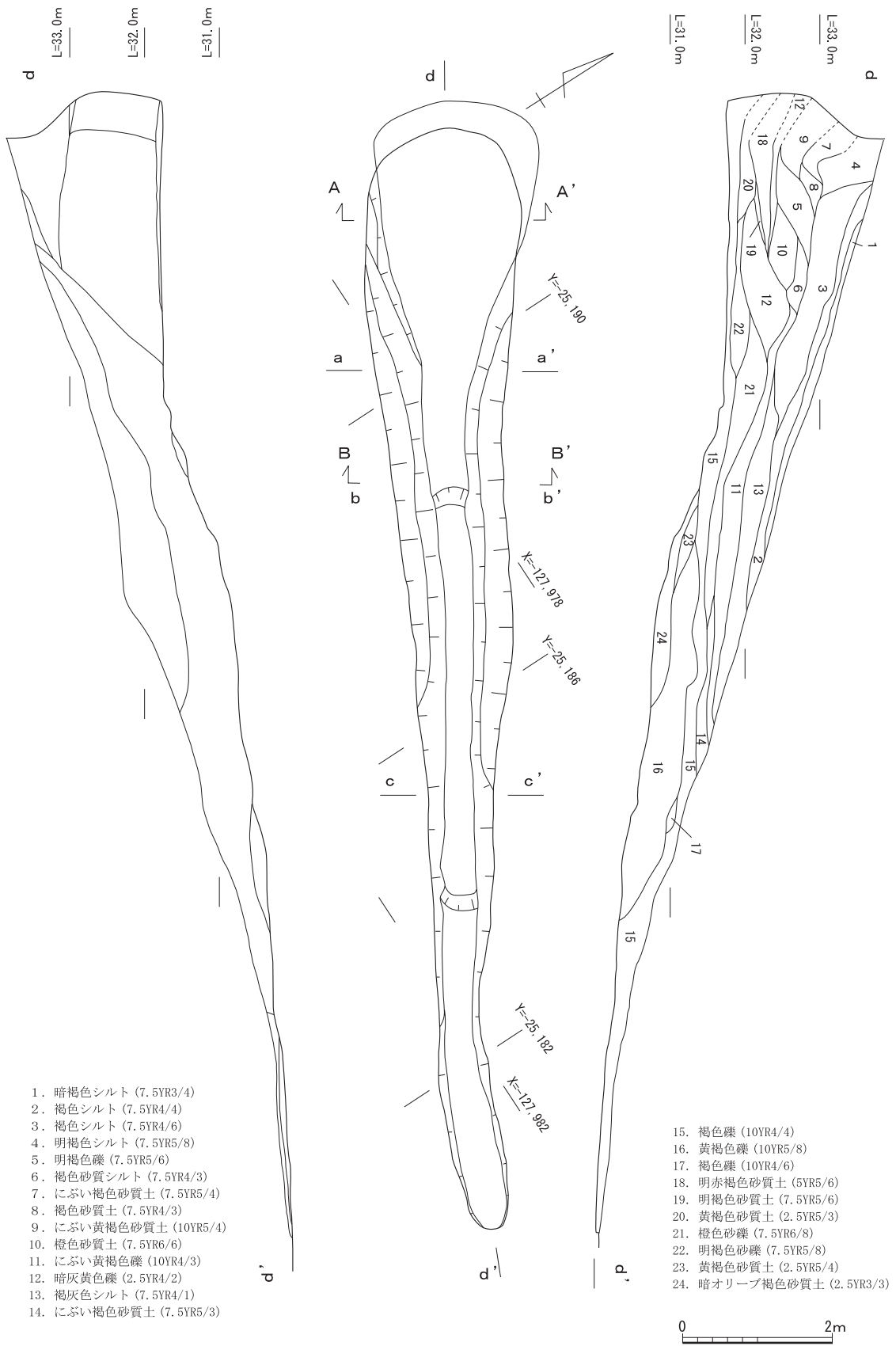
1～4・13層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈するシルト層である。5～9層は天井及び壁面の崩落土と考えられ、褐色や橙色を呈する礫土である。14～19層は埋葬後の堆積土で、褐色を呈する礫層である。玄室の床面は地山を形成する大阪層群で、この面から遺物が出土している。

### ③遺物出土状況

遺物は玄室の床面と埋土中、墓道から出土している。玄室床面出土遺物には須恵器壺1点(124)、須恵器長頸壺(126)、平瓶(125)、有蓋長脚高杯(122・123)、無蓋長脚高杯(121)、杯身(120)、耳環(129・130)がある。玄室左側壁に近い位置では、壺(124)と平瓶(125)が正立し、長頸壺(126)が口縁を奥壁側に向けて横転した状態で出土した。これらに近接して耳環129・130が揃って出土した。奥壁に近い玄室の中央付近では、高杯(121)が杯部を玄門方向へ向けて横転した状態で出土した。玄室奥壁の右隅に近い位置では、高杯(122・123)がともに杯部を壁側に向け横転し、杯身(120)は正立した状態で出土した。

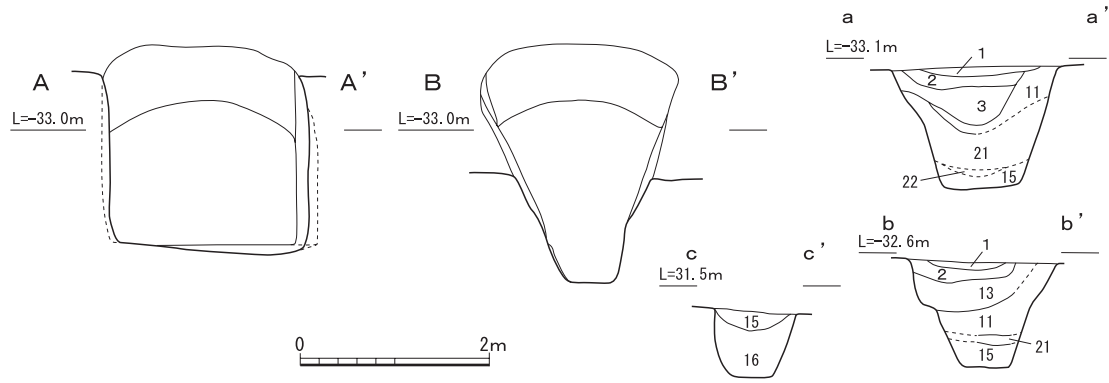
玄室埋土中からの出土遺物は須恵器杯蓋(128)である。墓道からの出土遺物は、須恵器杯身(119)、土師器椀(127)である。奥壁から5～6m付近の墓道内2か所から、椀(127)が出土した。出土地点の層位は、埋葬後に堆積した礫層で、玄室床面とほぼ同じ高さであることから、玄室内に置かれたものが土砂とともに墓道側へ流出した可能性がある。

### ④出土遺物

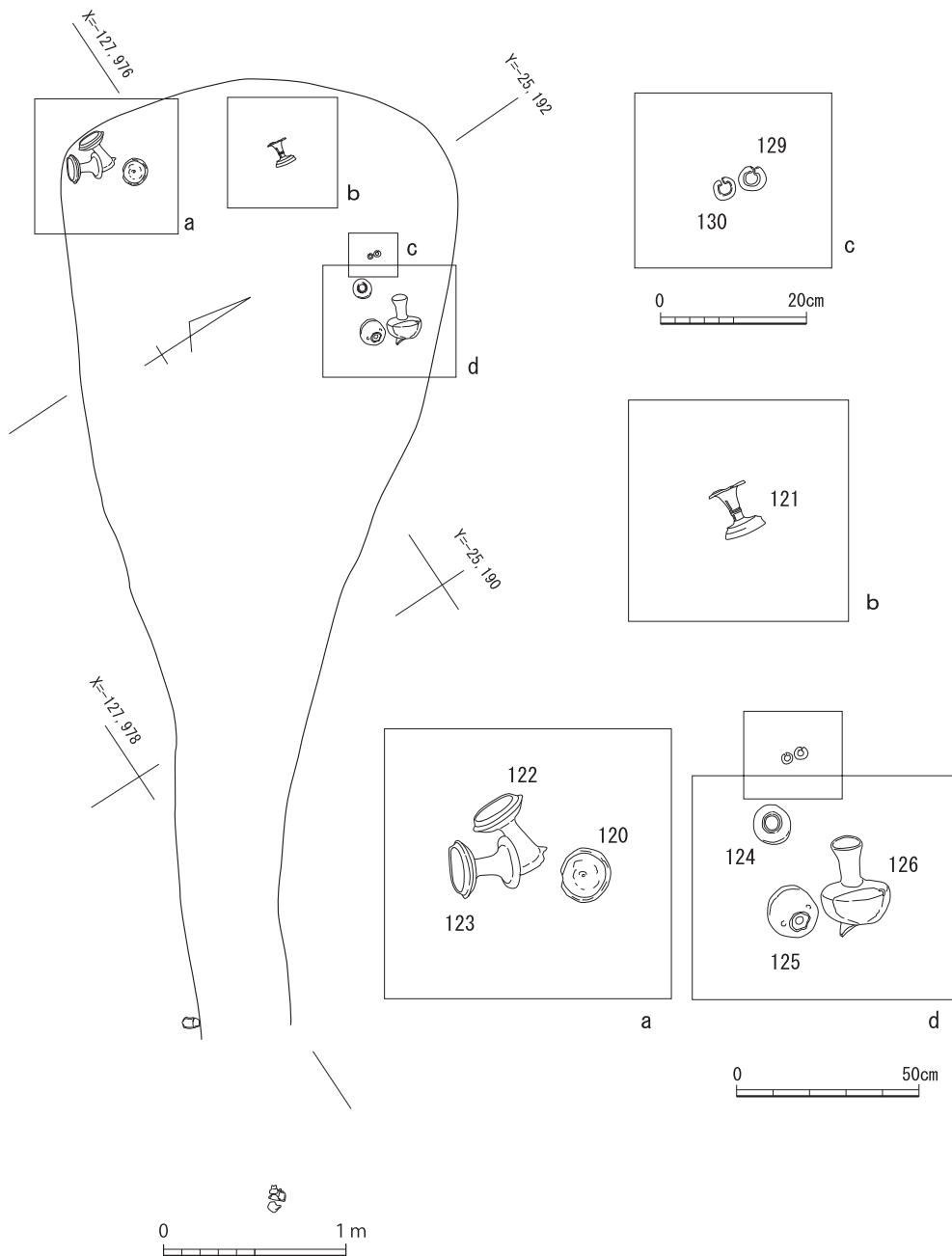


第21図 5号横穴実測図

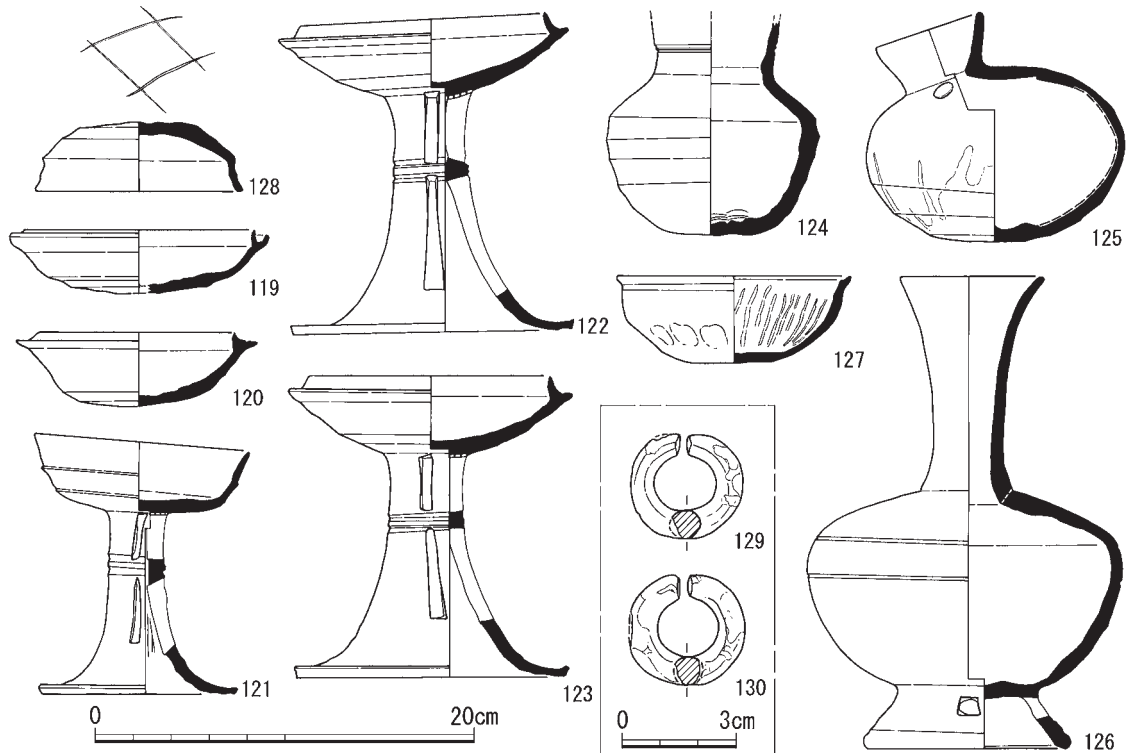




第22図 5号横穴立面図及び土層実測図(土色は第21図に同じ)



第23図 5号横穴遺物出土状況図



第24図 5号横穴出土遺物実測図

須恵器は玄室内から、土師器は墓道から出土した。須恵器壺(124)は口縁端部を欠くが、頸部径6.0cm、残存高12.0cmを測る。肩部以下をヘラケズリする。平瓶(125)は口径5.9cm、器高12.2cmである。肩部に吊り手を作らず、粘土の突体を貼り付ける。長頸壺(126)は口径7.8cm、器高25.0cmで、頸部と体部の接続部分に粘土の継ぎ目が見られる。また、短脚部の二方に縦・横1.0cmの透かしを作る。有蓋高杯(122・123)は口径13.0cm、器高16.0~17.0cmを測り、杯部の底部外面をヘラケズリとする。脚部は二段透かしで、上段は幅1.0cm、高さ3.0cm、下段は幅1.0cm、高さ5.0cmの透かしを二方に作る。無蓋高杯(121)は口縁11.8cm、器高13.8cmで、杯部外面に稜をもつ。杯身(120)は口径10.6cm、器高4.0cmで、底部外面をヘラケズリで仕上げる。TK217型式とみられる。杯蓋(128)は口径11.2cm、器高3.6cmで、外面をヘラケズリで仕上げる。天井部外面に井桁状の線刻を施す。耳環(129・130)は銀環で、ほぼ完形である。形状・出土状況などから対となるものである。

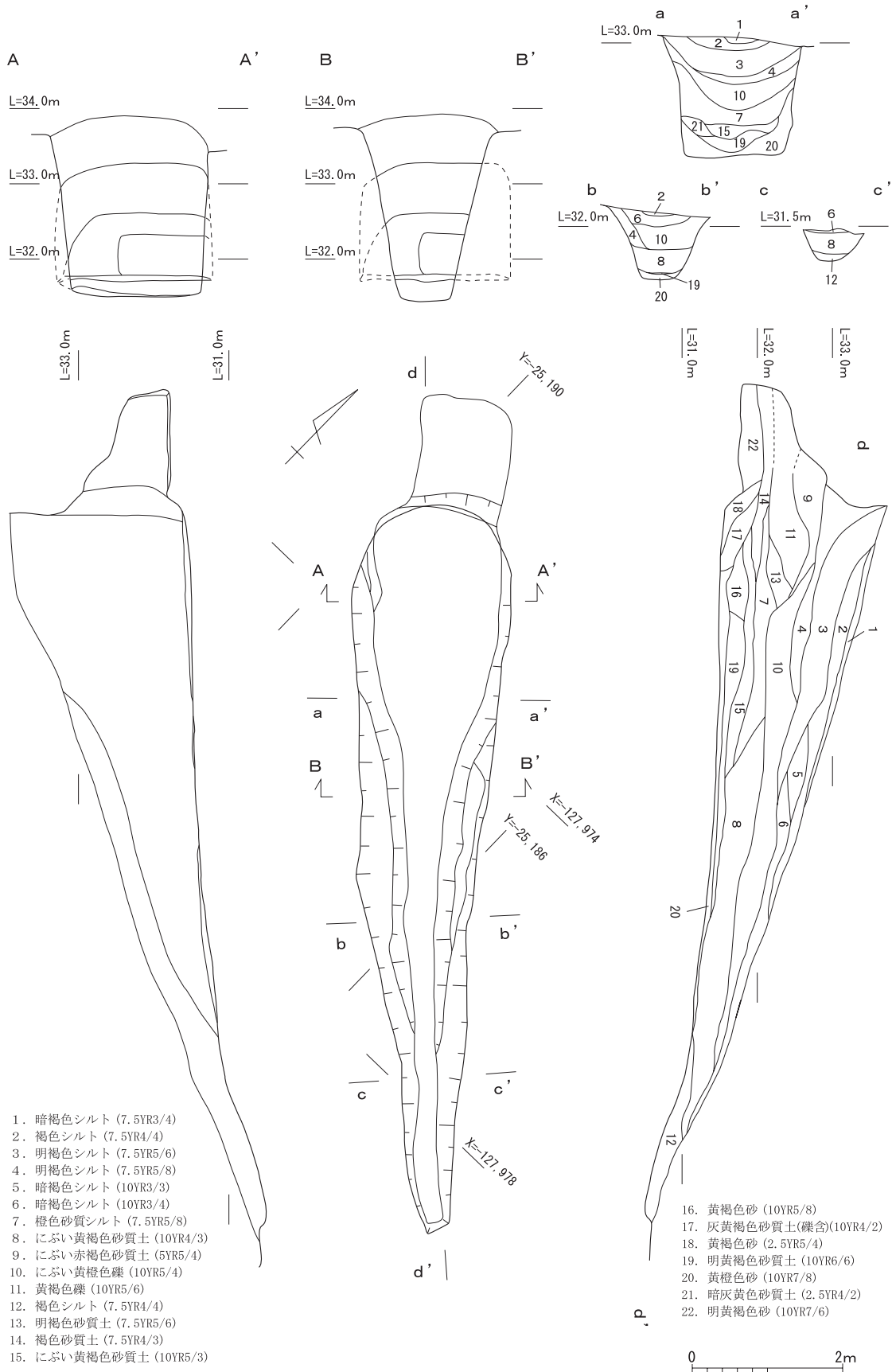
墓道の埋土から出土した須恵器杯身(119)は口径12.2cm、器高3.2cmで、外面をヘラケズリで仕上げる。土師器碗(127)は、口径12.6cm、器高4.6cmで、内面には暗文を施し、外面にはユビオサエの痕が残る。墓道内2か所から出土した破片が接合したものである。飛鳥Ⅱ型式と併行するものと考えられる。

(松元章徳)

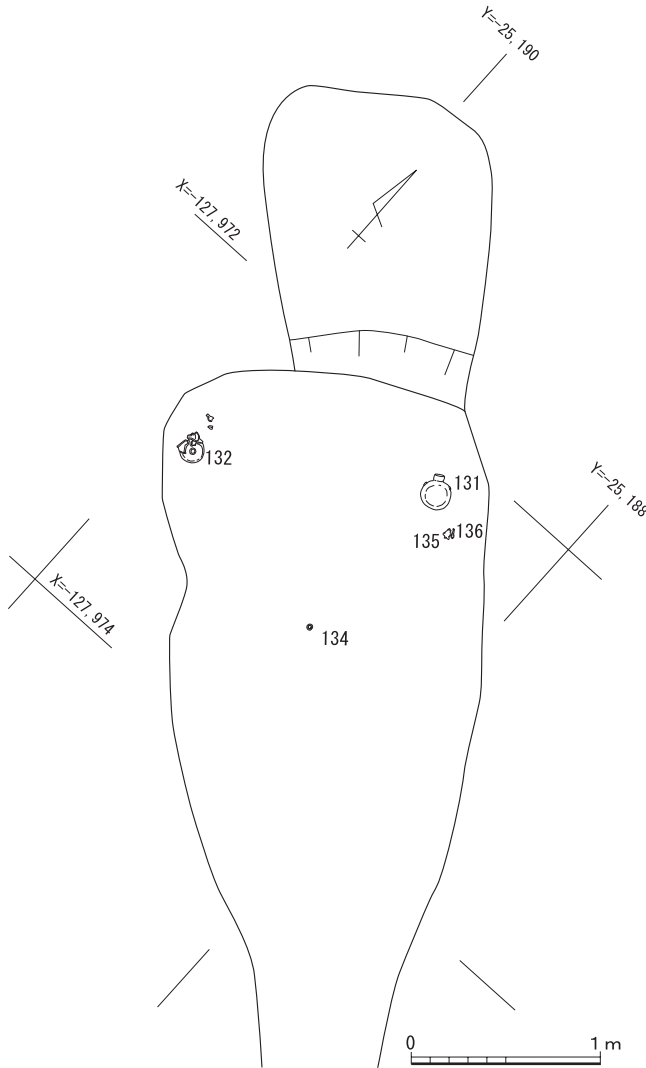
## 6) 6号横穴

### ①形態と規模

D支群中で最も小規模な横穴で、5号横穴と形態はやや異なり、墓道の入り口が斜面の高い位



第25図 6号横穴実測図



第26図 6号横穴遺物出土状況図

置にある。玄室は全体が杓文字形を呈し、床面は1面で水平に作る。天井崩落土の堆積状況から羨道を持たないものと判断する。玄門の位置は正確には判断しがたいが、玄室幅が急速に狭くなることと土層断面の観察より、奥壁から3.4m付近と考えたい。玄門部から墓道に至る付近から谷底に向かって床面が徐々に傾斜する。閉塞の状態は不明である。奥壁の北半分に天井高1.2m、奥行1.3mの小横穴を掘削する。床面は玄室床面より0.2m高い。出土遺物はなく、小横穴の性格は不明である。また、天井部は奥壁の小横穴部では残存するものの、その他の箇所では崩落していた。

各部長は次の通りである。全長11.0m、玄室長3.4m、玄室幅は奥壁部が最大で1.9m、玄門幅が0.7m、墓道長7.6m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN42°Wである。

### ②土層堆積状況

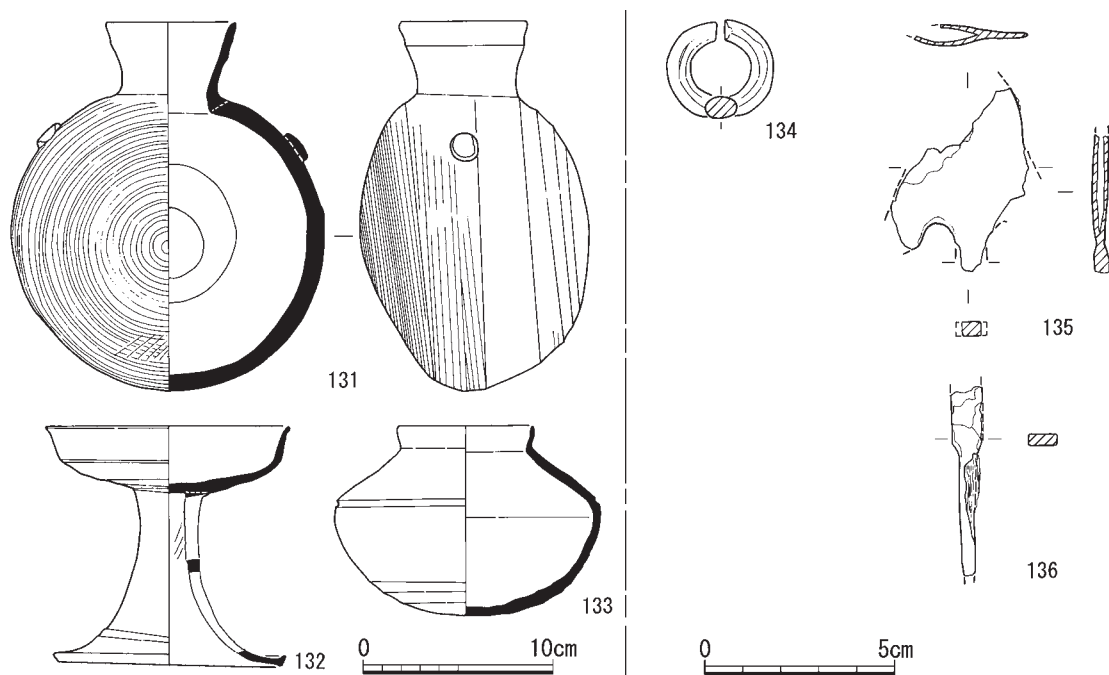
1～6層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈するシルト層である。8・10層も天井崩落後に堆積したと考えられ、橙色を呈する砂質土である。7・9・11・13～16・19層は天井崩落土で、天井部が残存していた玄室奥の小横穴部まで流入したものと考えられる。橙色の砂質土や褐色を呈する礫、砂質土が混じる。12・17・18・20～22層は埋葬直後の堆積土で褐色や橙色の砂質土である。玄室の床面は地山を形成する大阪層群で、この面から遺物が出土している。

### ③遺物出土状況

遺物は玄室床面と墓道外の谷底側斜面で出土した。玄室床面から出土した遺物は、須恵器提瓶(131)、同無蓋長脚高杯(132)、鉄製品断片(135・136)、耳環(134)である。玄室内左側壁奥から提瓶と鉄鏃が出土した。提瓶(131)は口縁を奥壁方向に向けて横転した状態で出土した。玄室中央の床面から耳環(134)が出土した。片方のみで、対となるものは出土しなかった。玄室右側壁の奥から高杯(132)が正立して出土した。谷側の斜面からは、須恵器有蓋短頸壺(133)が出土した。

### ④出土遺物

土器は須恵器のみで、土師器はない。提瓶(131)は口径7.0cm、器高20.0で、外面には部分的に



第27図 6号横穴出土遺物実測図

釉が付着し、肩部にボタン状の凸体を付ける。高杯(132)は、口径13cm、器高13cmで、口縁部内側と外面は回転ナデで、底部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。脚部は1.0cm四方の透かしを二方に作る。内面・外面ともに回転ナデである。杯部は、崩落した天井の土圧により破損していた。耳環(134)は材質不明である。片方のみで、対となるものは出土しなかった。鉄鏝(135・136)はともに腐蝕が著しいが、同一個体である可能性が高い。

墓道の延長部、谷側の斜面で出土した短頸壺(133)は口径7.0cm、器高10.0cmで、外面下半部はヘラケズリである。

(松元章徳)

## 7) 7号横穴

### ①形態と規模

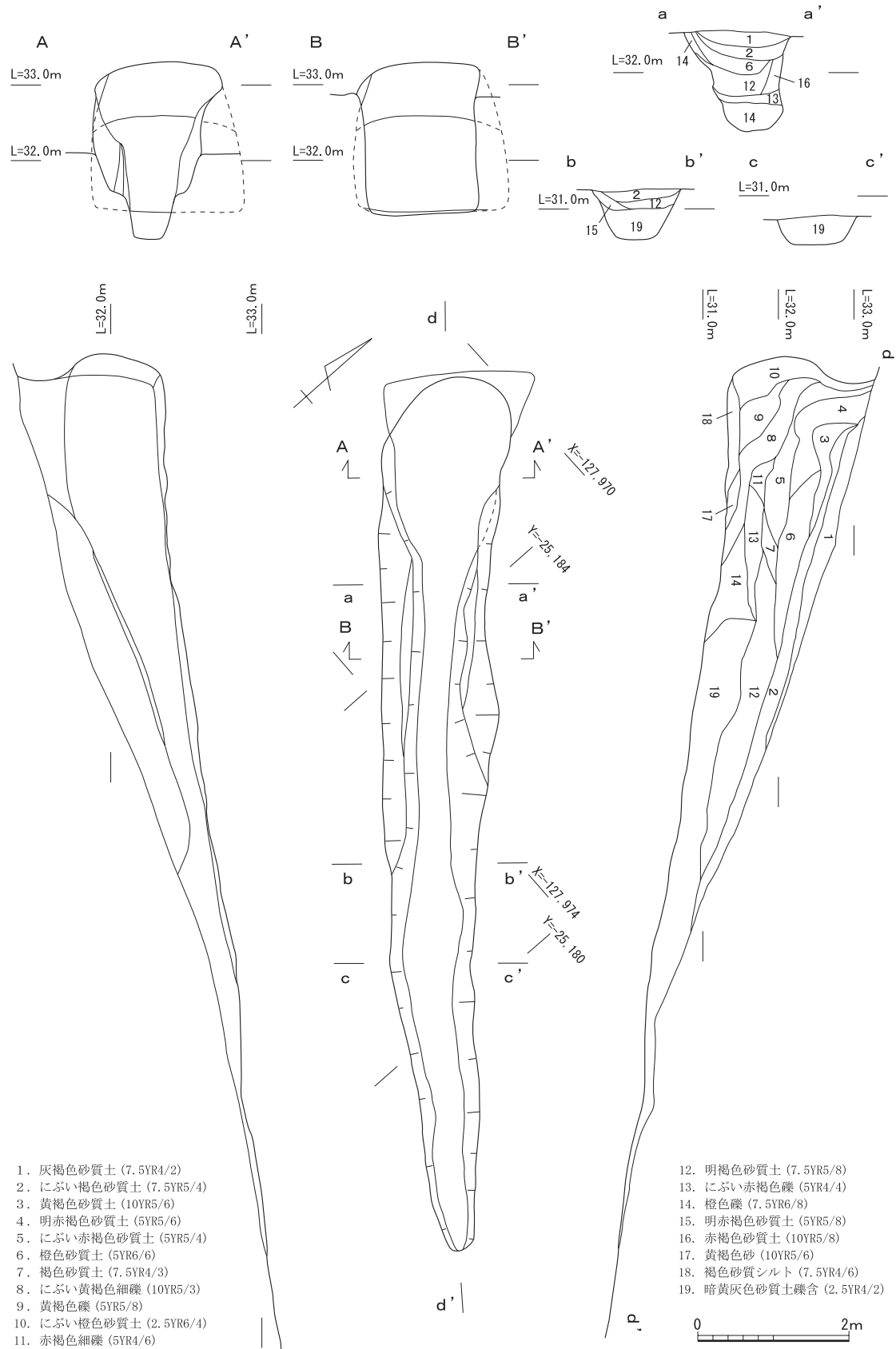
谷の入り口に最も近く、D支群の北東の端に位置する。玄室の平面は撥形を呈する。玄室床面は水平に作る。天井部は奥壁部分でわずかに残るのみで、他の箇所では崩落していた。

玄室の平面形と壁面が湾曲する状況、及び土層断面から、玄門の位置は奥壁から2.5m付近と推定される。閉塞の状態は不明である。羨道はない。墓道の床面は谷底に向かって傾斜し、先端はやや北東に振る。

各部長は次の通りである。全長11.8m、玄室長2.8m、玄室幅は奥壁部が最大で1.9m、玄門幅が0.8m、墓道長9.1m、墓道の最大上幅1.6mである。主軸はN48°Wである。

### ②土層堆積状況

1・2層は天井崩落後の堆積土で、褐色を呈する砂質土である。3～7・12層は天井及び壁面崩落土の砂質土で、崩落後に土砂の一部が谷側へ流れたものと考えられる。8～10層は奥壁付近



第28図 7号横穴実測図

の天井や壁面の土が崩落し、流入したと考えられる褐色を呈する礫層である。11・13・14・19層は埋葬後に堆積したと考えられる礫層である。

玄室の床面は地山を形成する大阪層群である。この面から遺物が出土している。

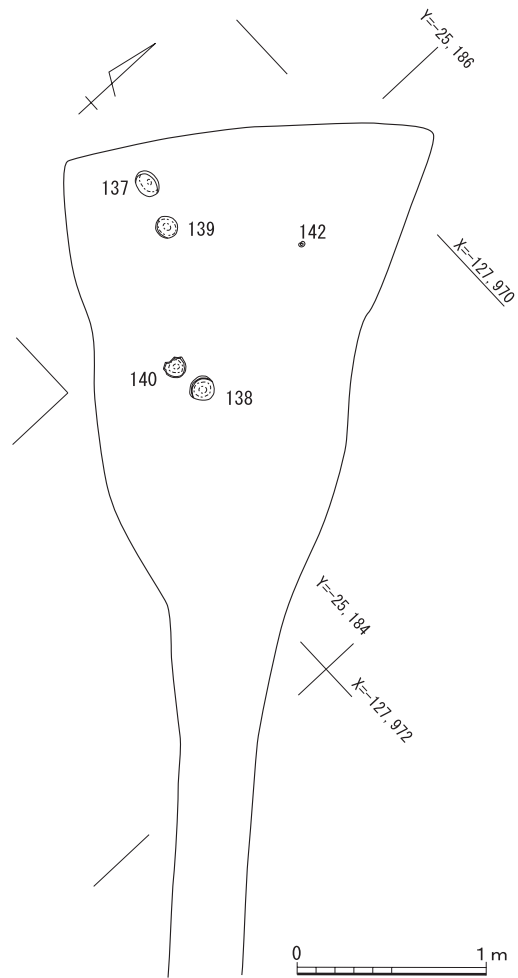
### ③遺物出土状況

玄室内床面から、須恵器無蓋短脚高杯(137～140)と耳環(142)、玄室内埋土中から鉄製品(143～146)、墓道内の埋土中から須恵器壺(141)が、それぞれ出土した。

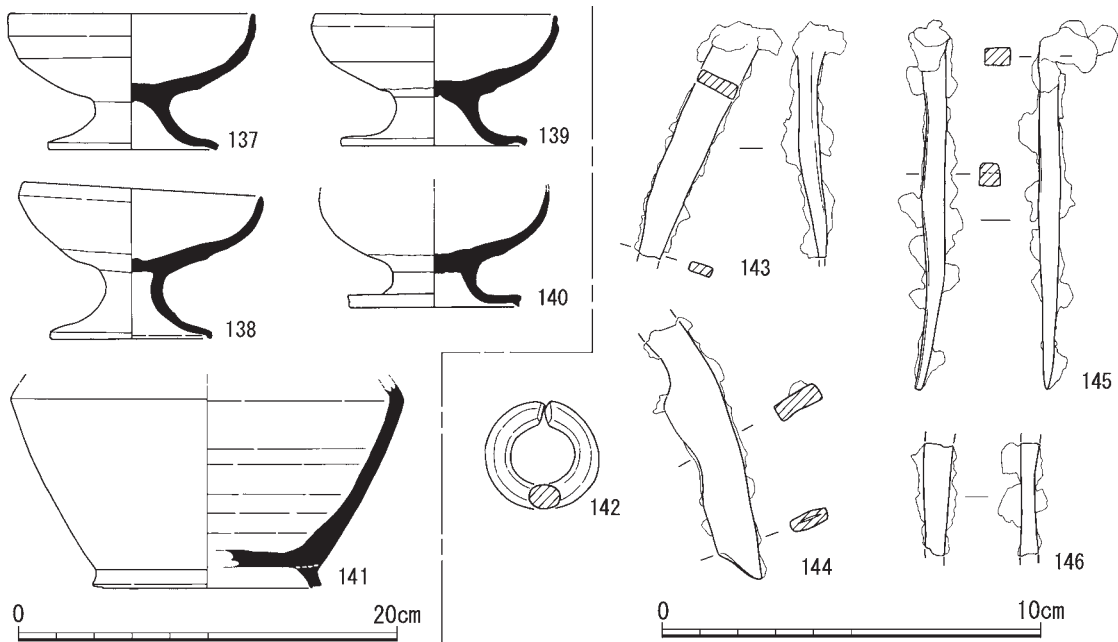
玄室中央より右の奥壁に近い位置から短脚高杯(137・139)が、玄室の床面中央部から短脚高杯(138・140)が、いずれも正立した状態で出土した。耳環(142)は玄室中央よりも左側の奥壁に近い位置から片方のみ出土した。

### ④出土遺物

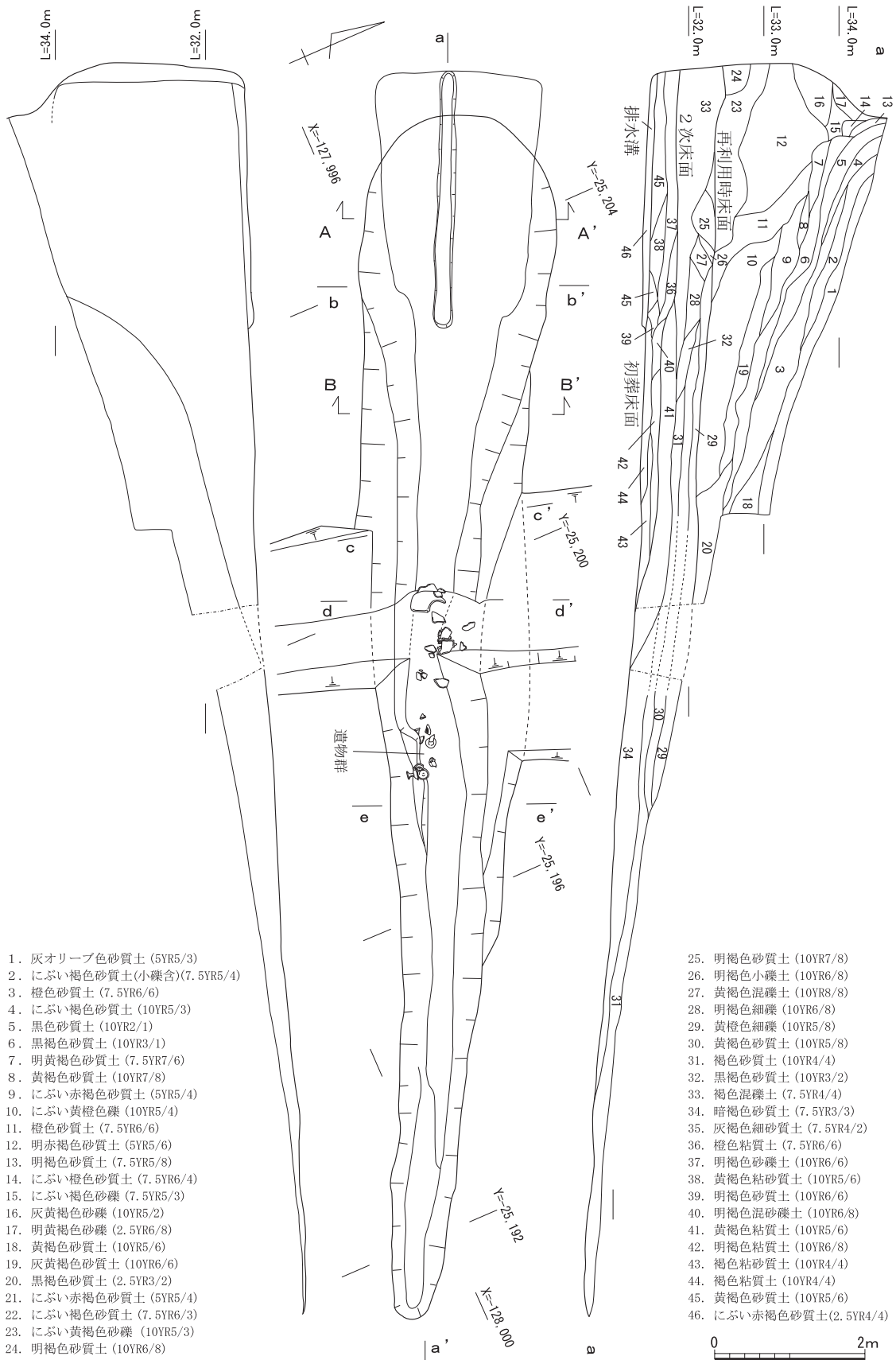
土器は須恵器のみで、土師器は出土していない。短脚高杯(137～140)はいずれもほぼ完形である。口径13.0cm、器高7.0～8.0cmで、焼成は



第29図 7号横穴遺物出土状況図



第30図 7号横穴出土遺物実測図



1. 灰オリーブ色砂質土 (5YR5/3)
2. にぶい褐色砂質土(小礫含)(7.5YR5/4)
3. 橙色砂質土 (7.5YR6/6)
4. にぶい褐色砂質土 (10YR5/3)
5. 黒色砂質土 (10YR2/1)
6. 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
7. 明黄褐色砂質土 (7.5YR7/6)
8. 黄褐色砂質土 (10YR7/8)
9. にぶい赤褐色砂質土 (5YR5/4)
10. にぶい黄橙色礫 (10YR5/4)
11. 橙色砂質土 (7.5YR6/6)
12. 明赤褐色砂質土 (5YR5/6)
13. 明褐色砂質土 (7.5YR5/8)
14. にぶい褐色砂質土 (7.5YR6/4)
15. にぶい褐色砂礫 (7.5YR5/3)
16. 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2)
17. 明黄褐色砂礫 (2.5YR6/8)
18. 黄褐色砂質土 (10YR5/6)
19. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/6)
20. 黒褐色砂質土 (2.5YR3/2)
21. にぶい赤褐色砂質土 (5YR5/4)
22. にぶい褐色砂質土 (7.5YR6/3)
23. にぶい黄褐色砂礫 (10YR5/3)
24. 明褐色砂質土 (10YR6/8)

25. 明褐色砂質土 (10YR7/8)
26. 明褐色小礫土 (10YR6/8)
27. 黄褐色混礫土 (10YR8/8)
28. 明褐色細礫 (10YR6/8)
29. 黄褐色細礫 (10YR5/8)
30. 黄褐色砂質土 (10YR5/8)
31. 褐色砂質土 (10YR4/4)
32. 黒褐色砂質土 (10YR3/2)
33. 褐色混礫土 (7.5YR4/4)
34. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3)
35. 灰褐色細砂質土 (7.5YR4/2)
36. 橙色粘質土 (7.5YR6/6)
37. 明褐色砂礫土 (10YR6/6)
38. 黄褐色粘砂質土 (10YR5/6)
39. 明褐色砂質土 (10YR6/6)
40. 明褐色混砂礫土 (10YR6/8)
41. 黄褐色粘質土 (10YR5/6)
42. 明褐色粘質土 (10YR6/8)
43. 褐色粘質土 (10YR4/4)
44. 褐色粘質土 (10YR4/4)
45. 黄褐色砂質土 (10YR5/6)
46. にぶい赤褐色砂質土 (2.5YR4/4)

第31図 8号横穴実測図

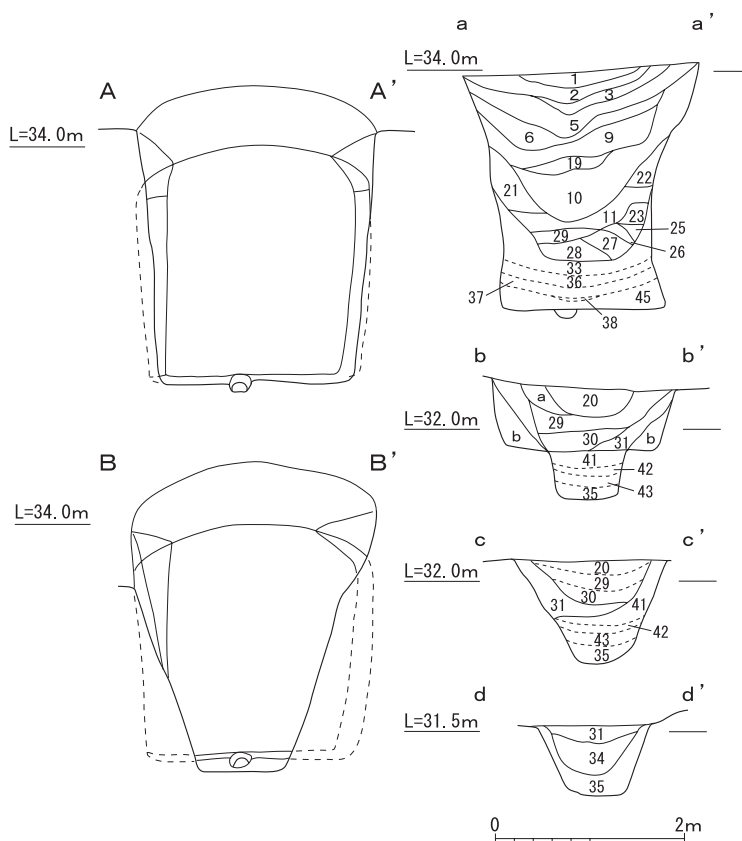


軟である。短脚高杯(140)は口縁端部が欠損する。口径12.0cm、器高7.0cmで、焼成は軟である。

耳環(142)は金環である。対になるものは出土していない。鉄製品は鉄釘(145)と不明断片(143・144・146)である。

墓道の埋土から出土した須恵器壺(141)は、胴部のみで、肩から上部を欠く。内面・外面ともに回転ナデで仕上げる。高台径11.8cm、残存高10.0cmである。8世紀(Ⅳ型式2～3段階)の様相を呈し、他の出土遺物よりも新しいことから、2次利用の可能性が考えられる。

(松元章徳)



第32図 8号横穴立面図及び土層実測図(土色は第31図に同じ)

## 8) 8号横穴

### ①形態と規模

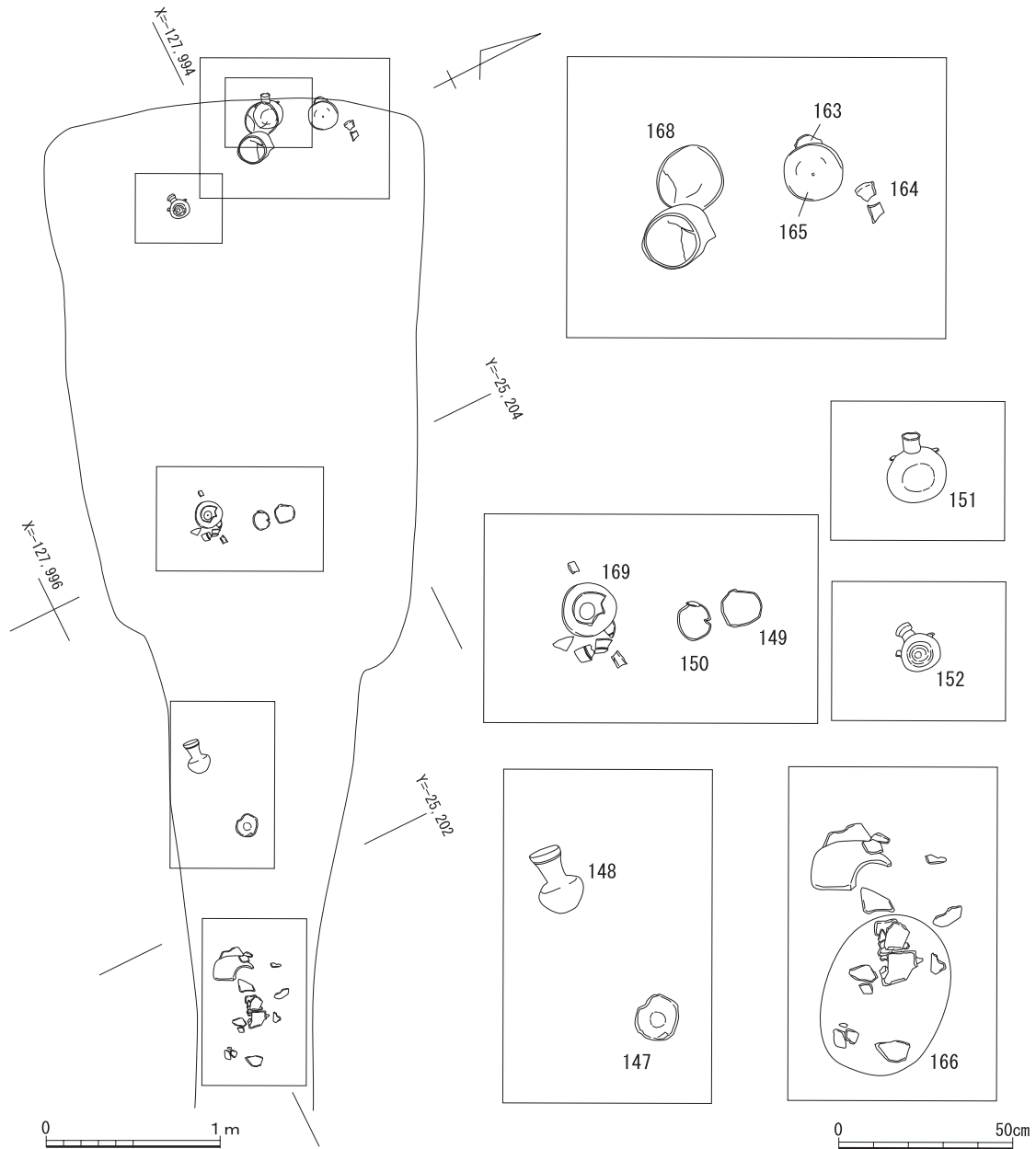
4号横穴の南東側に位置する。D支群の中では、谷の最奥部に位置する。玄室平面形は、長方形を呈する。横穴平面形には、玄室奥壁から3.3mで明瞭にくびれる部分があり、これが玄門と考えられる。また、追葬に伴うと考えられる2次床面がある。初葬時の玄室床面は大阪層群で、ほぼ平坦に仕上げる。初葬時の玄室床面には、奥壁から玄門に向って直線的に延びる幅約20cm、深さ約8cmの排水溝を設ける。この横穴は、D支群では唯一の排水溝を持つ横穴である。2次床面は、低い段状になる。墓道はあまり傾斜を持たない。

この横穴の規模は、全長15.6m、玄室長3.3m、玄室奥壁側幅2.2m、玄室玄門側幅1.6m、玄門幅1.2m、墓道長12.3m、墓道最大上幅2.2mを測る。主軸はN66°Wである。

### ②土層堆積状況

1～9層・18～20層は、横穴の天井部崩落以後の堆積と考えられる砂質土層である。この横穴は、4号横穴と同様に、9世紀頃に再利用されており、10～17層、23・24層は、再利用以後に堆積した横穴天井部等の崩落土とみられる砂礫や砂質土である。25～34層・41層は、2次床面上に堆積した天井部崩落土および流入土とみられる礫・砂質土層である。36～40層・42～45層は、追葬時の2次床面を構築する際の盛土層で、砂礫や粘質土などである。46層は、排水溝埋土の細砂質土である。

### ③遺物出土状況

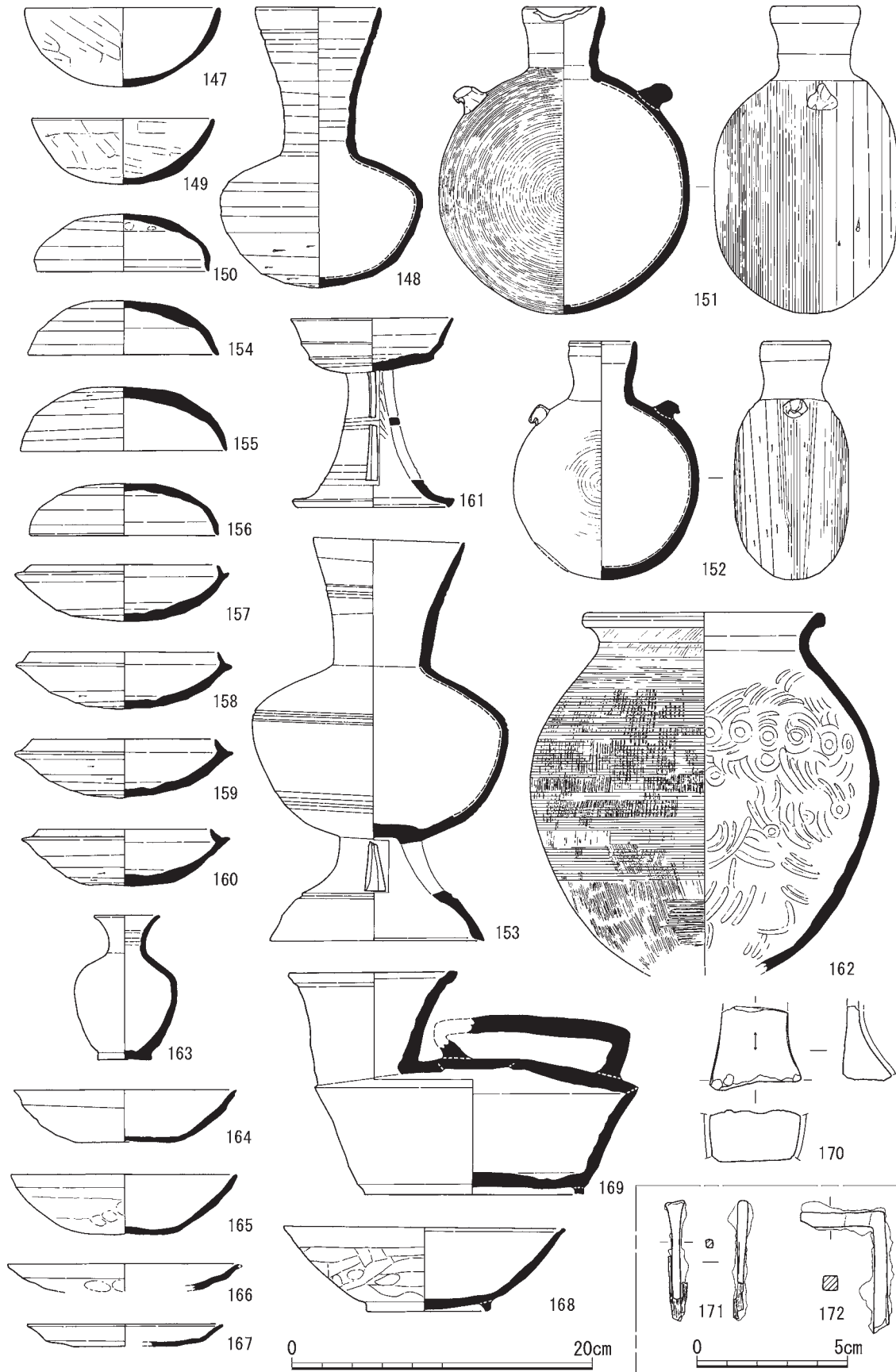


第33図 8号横穴遺物出土状況図

初葬時の玄室からは、顕著な遺物は出土していない。初葬時の遺物としては、玄門外側で、須恵器長頸壺(148)、土師器杯(147)が出土している。玄室の2次床面では、奥壁側から須恵器提瓶(151・152)が、玄門側から須恵器台付長頸壺(153)が出土している。また、不明鉄製品(171・172)も出土している。

墓道からは、須恵器杯蓋(154~156)、須恵器杯身(157~160)、須恵器高杯(161)が、まとめて出土している。このうち、須恵器杯蓋(156)には、初葬時床面の排水溝埋土から出土した須恵器片が接合できた。このことから、墓道出土の須恵器は、初葬時の副葬品と考えられる。追葬にあったって、玄室内から掻き出されたものか。他に、墓道埋土から、須恵器甕(162)が出土している。砥石(170)も墓道埋土から出土している。

玄室奥壁付近の再利用面上からは、須恵器小壺(163)、須恵器平瓶(169)、土師器杯(164・



第34図 8号横穴出土遺物実測図

165・168)、土師器皿(166・167)が出土している。須恵器平瓶(169)は逆転して出土しており、棺などの上に置かれていたものが、腐朽によって転落したのか。

#### ④出土遺物

土師器杯(147)は、丸味を持つ形態で、外面にヘラケズリが残り、内面はナデ調整である。須恵器長頸壺(148)は、扁平気味の体部から外開き気味に長い頸部が立ち上がり、特徴的な形態である。これら2点は、初葬床面から出土した。

土師器杯(149)は、やや浅目の丸味を持つ形態である。須恵器杯蓋(150)は、口縁端部が内湾気味になり、口径が11.4cmと小さ目である。TK217型式に相当するとみられる。須恵器提瓶(151・152)は、大小の差はあるが、外開き気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。肩部に形骸化した吊手を持ち、体部全面はカキ目調整、背面はヘラケズリである。須恵器台付長頸壺(153)は、胴部と肩部の境に2条の沈線を持ち、脚部には3方向に透かしを持つ。以上5点は、2次床面出土土器である。

須恵器杯蓋(154～156)は、天井部が丸味を持ち、口径は12.4～13.7cmである。TK209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器杯身(157～160)は、底部が丸味を持つものと、台形状になるものがある。口径は11.4～12.5cmである。杯蓋と同じく、TK209型式でも新しい様相を示すものとみられる。須恵器高杯(161)は、無蓋高杯で、脚部は2方向の2段透かしである。以上8点は、墓道から出土した。上記のとおり、須恵器杯蓋(156)は、初葬床面の排水溝から出土した破片が接合でき、これらの墓道出土の土器は、初葬時の副葬品と考えられる。

須恵器甕(162)は、体部外面が細かいタタキ後カキ目調整、内面には同心円状のタタキがみられる。墓道埋土から出土した。砥石(170)は各面に使用痕がある。墓道埋土から出土した。

鉄製品(171)は、断面が四角形で木質が残る部分がある。釘の一部か。鉄製品(172)は、「L」字状の形状で、断面は四角形を呈する。

(引原茂治)

#### 9)土坑

横穴の他に土坑を3基検出した。

**SK6** 1号横穴と2号横穴の間で検出した土坑で、長径0.85m、短径0.65m、深さ0.1mである。須恵器杯身・無蓋高杯・壺等が出土した。出土遺物の詳細は昨年度の報告を参照されたい。

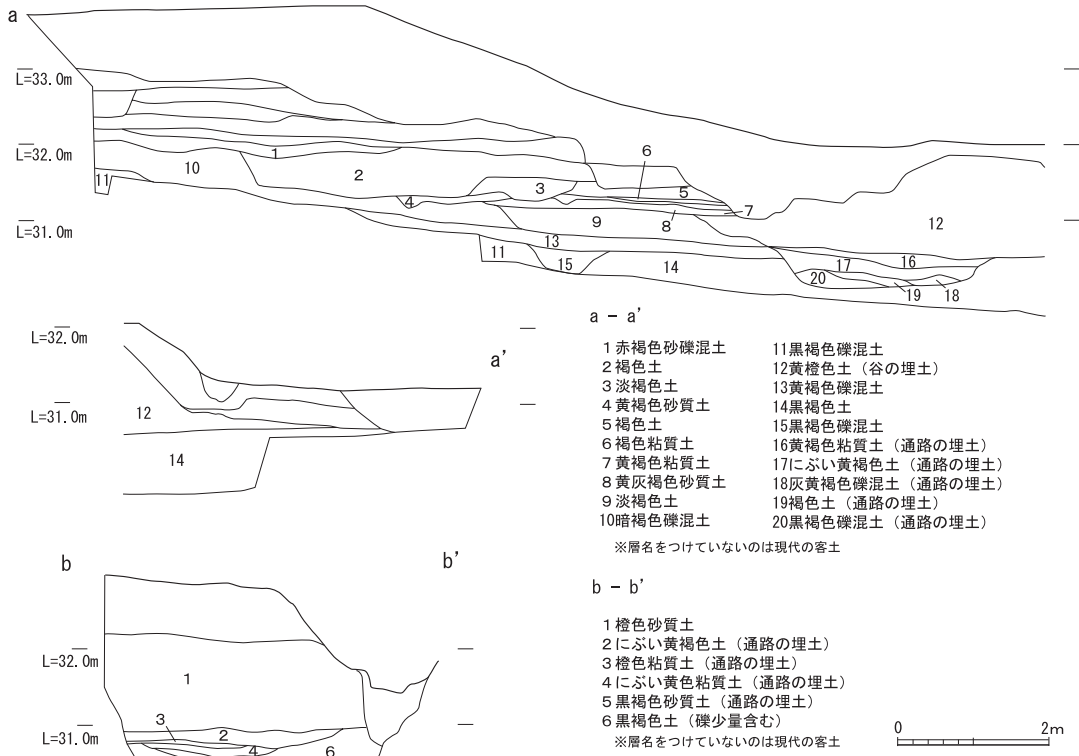
**SK9** 7号横穴の北東側で検出した土坑で、幅1.4m、長1.7m、深さ45cmである。遺物の出土はなかった。

**SK10** 谷の入り口部で検出した土坑で、幅1.2m、長1.4m、深さ45cmである。遺物は出土しなかった。

(引原茂治)

#### 10)第12次調査(第3・35・36図)

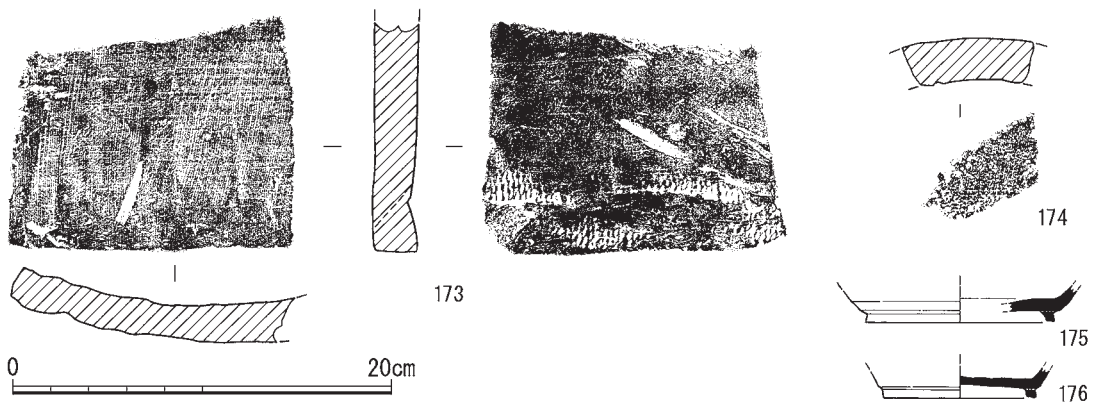
平成21年度の第11次調査の成果により、谷の南東側斜面に横穴が分布することが予想されたため、第11次調査で確認した8基の横穴に対面する斜面に調査区を設定して調査を実施した。



第35図 第12次調査谷中央部断面図(土層位置は第37図参照)

重機により表土を掘削し、その後人力掘削を進めたところ、横穴は確認できなかった。谷の中央部では、第11次調査で確認されていた溝状の落ち込みの続きを確認した。この落ち込みは、幅1~2.5m、深さ30~50cmで、約22mにわたって検出した。埋土は礫を主体とし、西に向かって次第に浅くなる。表土から検出面まで近世以降の流土や現代の客土が堆積していた。埋土は上層が黄褐色系の土で、下層は黒褐色礫層である。第35図17層直下で平安時代の瓦が出土した(第36図173)。この瓦は内面に布目圧痕が認められ、外面はタタキのちケズリである。同様のものが美濃山廃寺で出土している<sup>(注3)</sup>。横穴の再利用と同じ時期の遺物であることから、それに伴うものと考えられる。また、谷の埋土からは須恵器杯Bの底部片が出土した(175・176)。

この谷内の溝状の落ち込みは、各横穴の墓道の端部を連ねる位置あることと、少なくとも平安



第36図 第12次調査出土遺物実測図

時代前期には露頭していたこと、それより下には20cm程度の堆積土しかなく、溝の底面が横穴掘削時の地表面と判断されることから、横穴掘削時～再利用時にかけての通路であったと判断される(第37図)。同様の墓地内通路状の遺構は、女谷A～C支群においても確認されている。

なお、丘陵の尾根筋は、地表下約2mまで後世の攪乱がおよんでおり、削平されていた。

(松尾史子)

## 5. まとめ

今回検出した女谷D支群には、横穴の規模、副葬品の内容やその多寡などに違いがあり、被葬者の地位などが反映している可能性も考えられる。また、他の支群とはやや離れた場所に営まれていることや、限られた場所に密集して横穴が造られている様子から、家族や一族のような集団によって営まれた墓や、あるいは、一集落の墓地と考えることができよう。

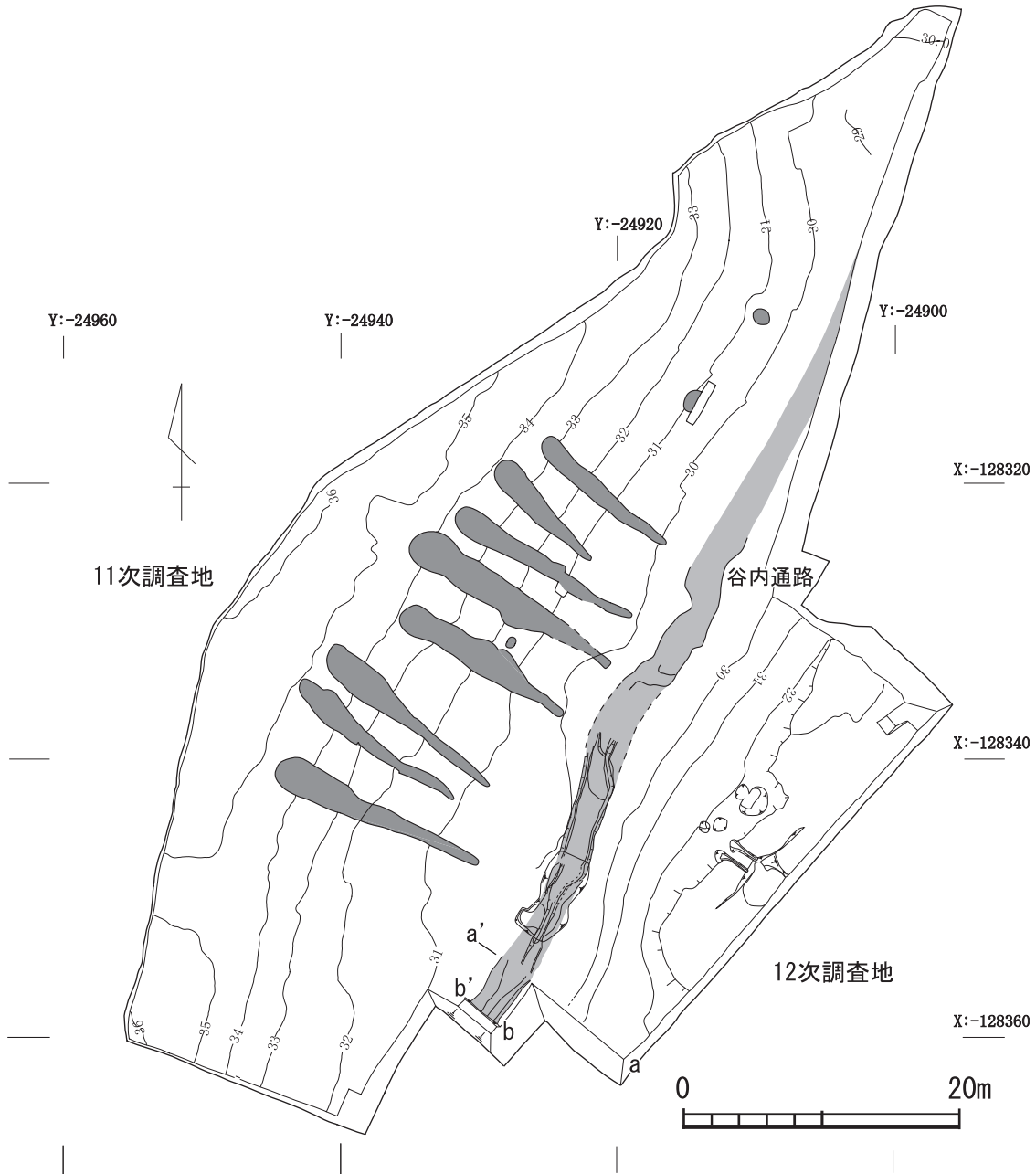
横穴が配置されている間隔から、1・2・5・6・7号横穴の5基と3・4・8号横穴の3基のグループに分かれる可能性がある。これらの横穴では、4号横穴が最も早く6世紀末頃に造られたものとみられ、やや遅れて、その他の横穴が造られたとみられる。時期を知る標識となる蓋杯が出土しない横穴もあるため、詳しい築造順は今後の検討課題であるが、規模の大きいものが先行し、小さいものが新しくなるものとみられる。なお、人骨が残る横穴はなかった。

それぞれの横穴には、須恵器・土師器のほか、耳環や鉄製品などが副葬されている。出土した土器から、このD支群はTK209型式期からTK217型式期頃(古墳時代末～飛鳥時代)にかけて築造されたと考えられる。女谷・荒坂横穴群では、これまで荒坂A～C支群、女谷A～C支群の調査を行っている。最も早く築造が開始されたのは荒坂B支群で、TK43型式併行期と考えられる。TK209型式併行期には、その他の支群でも横穴の築造がはじまり、TK217型式併行期まで使用される。女谷D支群は、女谷・荒坂横穴群の築造の最盛期に営まれた支群と考えられる。

4号横穴と8号横穴では、ある程度内部が埋まった段階で、墓として再利用された状況を確認した。須恵器や土師器が出土し、それらの土器から9世紀頃に再利用されたものとみられる。特に4号横穴では、土器のほかに、瑞雲双鸞八花鏡という銅鏡が副葬されていた。この鏡は、唐鏡を原型として日本で作られた踏み返し鏡とみられる。鏡背を上にした状態で出土しており、下に

付表 女谷D支群横穴一覧

横穴番号	全長	玄室長	玄室最大幅	墓道長	玄室の形状	築造時期	追葬・再利用の有無	備考
1	17.2	3.5	2.5	13.7	羽子板形	TK209～TK217	追葬・再利用無し	
2	13.8	2.1	2	11.7	羽子板形	TK209～TK217	追葬有り	
3	15.3	3.6	2.2	11.7	撥形	TK209		
4	15.7	3.5	2	12.2	羽子板形	TK209	再利用有り	鏡出土
5	15.2	3.6	2.5	11.6	杓文字形	TK217	追葬・再利用無し	
6	11	3.4	1.9	7.6	杓文字形	TK217	追葬・再利用無し	
7	11.8	2.8	1.9	8.3	撥形	TK217	追葬・再利用無し	
8	15.6	3.3	2.2	12.3	長方形	TK209	追葬・再利用有り	



第37図 女谷D支群(第11・12次調査)と谷内通路

なっていた鏡面には紙の痕跡が残る。紙に包んで副葬されたものと考えられる。同様の鏡が、奈良県霊安寺跡から出土している。今回出土した鏡と比較すると、大きさや文様の状態が非常に類似しており、同じ鏡を原型として作られた可能性もある。今回出土した鏡は、湯廻りが悪かったのか、周縁部の花形や雲形の文様が半周分鋳出されていないが、当時の貴重品と考えられる。

なお、ほとんどの横穴が、谷底付近から墓道を掘削しており、谷底を通路として使用していたものと考えられる。谷底部は、雨水などの水流によるものか、浅く窪む。埋土から布目瓦片が出土しており、あるいは再利用された時期の通路であった可能性も考えられる。

京都府下では、丹後地域の峰山町・大宮町付近や丹波地域の綾部市や京丹波町、南山城地域の八幡市・京田辺市付近に横穴が分布している。こういった点で、横穴式石室墳がほぼ一様に分布

するのに比べると、横穴は特殊な墓制と言えよう。

丹後地域の横穴は、7世紀から築造が始まり、一部では、8世紀前半まで築造が続く。横穴の築造が開始される時期は、他地域と比べて、やや遅れる。横穴の築造は、丹後地域の中央部付近に集中している。京丹後市大宮町の大田鼻横穴では、「厨」「厨物」などの墨書土器が出土している。地方官人が被葬者であったとも考えられる。この横穴群が位置する丘陵の上部には古墳群が存在するが、古墳群の築造は6世紀前半に終わっており、横穴築造開始までには若干の時間差がある。したがって、古墳の築造者と横穴の築造者には関連がない可能性も考えられる。なお、これらの横穴の中には、平安時代に再利用されたものもある。

丹波地域は、京都府内の他地域に較べると、その数ははるかに少なく、むしろ、横穴が築造されなかった地域とした方が適切であるかもしれない。栗ヶ丘古墳群内では、3基の横穴が確認されている。古墳が分布する丘陵の斜面部に位置し、6世紀末頃から7世紀初めにかけて築造されたと考えられる。横穴は追葬を前提とする墓制であるが、栗ヶ丘横穴群ではどの横穴も追葬の形跡がみられない。一方、古墳群においては、6世紀後半から末頃にかけて、家族墓的な一墳複数主体部の古墳から一墳一主体部の家父長のみを埋葬したと考えられる古墳に移り変わる。それに続いて造営されたと考えられる横穴でも、単葬が引き継がれており、古墳の築造者と横穴の築造者は同系統とみられる。丹波での横穴の築造は、短期間で終了する。

南山城地域の横穴は、木津川流域に分布しており、特に、八幡市、京田辺市付近の丘陵地に集中する。女谷D支群がある女谷・荒坂横穴群では、これまで、52基の横穴を調査している。今回、さらに8基の横穴を調査した。調査された横穴だけでも60基を数え、府下でも最大級の横穴群と言える。この横穴群の築造は6世紀後期に始っており、他地域よりも早い。その後、7世紀中葉頃まで築造、使用が続く。付近には、古墳時代後期の古墳はほとんど分布していない。大規模な横穴群であるにもかかわらず、横穴築造の契機は不明である。

八幡市の南に隣接する京田辺市には、「大住」という地名が残り、律令期以前から大住隼人が居住しており、宮殿の警護役や舞人として宮廷に仕えたと言われる。隼人の出身地である南九州地域には横穴が多く分布することから、南山城の横穴も隼人の墓とする説もある。ただ、南九州地域の特徴的な横穴である「地下式横穴墓」は、今回の調査でも確認できず、これまでの南山城地域の調査でも確認されていない。地名や伝説から、付近に隼人が多く居住していた可能性は考えられるが、今の時点で、考古学的に、横穴と隼人を確実に結び付けるには至っていない。

(引原茂治)

注1 岩松保ほか『京都府遺跡調査報告書 女谷・荒坂横穴群』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

注2 松尾史子・村田和弘「女谷・荒坂横穴群第10・11次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

注3 八幡市教育委員会大洞真白氏のご教示による。



# 圖 版



(1)女谷D支群遠景(北東から)



(2)女谷D支群全景(南東から)



(1) 女谷D支群全景(南東から)



(2) 女谷D支群全景(空撮：上が北西)



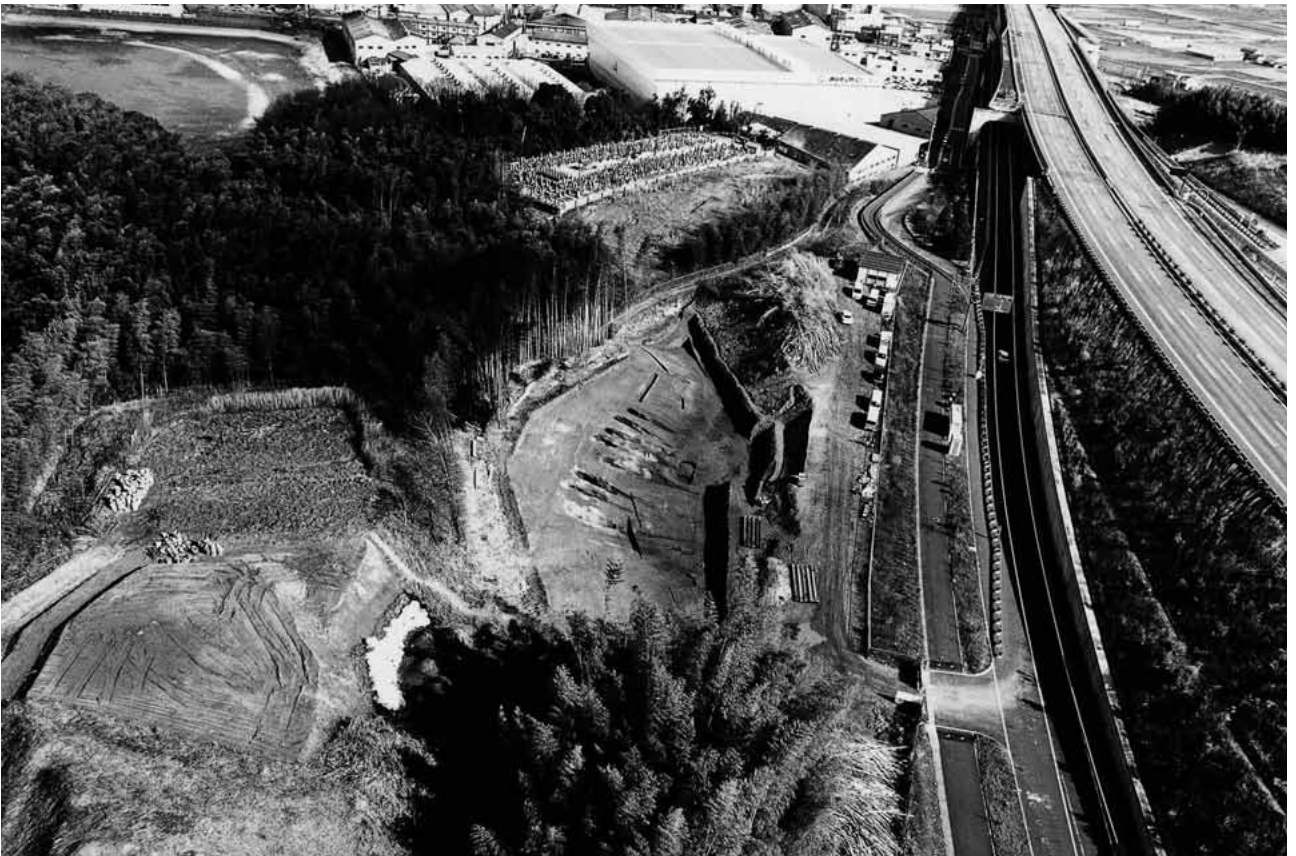
(1) 女谷D支群全景(東から)



(2) 女谷D支群全景(南から)



(1) 女谷D支群遠景(北東から)



(2) 女谷D支群遠景(南西から)



(1) 5～7号横穴検出状況(東から)



(2) 5～7号横穴検出状況(南東から)



(1) 1号横穴遺物出土状況  
(南東から)



(2) 1号横穴遺物出土状況側面  
(南東から)



(3) 2号横穴遺物出土状況  
(南東から)



(1) 3号横穴玄室断面(北東から)



(2) 3号横穴玄室奥壁付近  
遺物出土状況(南東から)



(3) 3号横穴玄室中央部  
遺物出土状況(南東から)





(1) 3号横穴玄室全景(南東から)



(2) 4号横穴玄室全景(南東から)



(1) 4号横穴再利用面鏡出土状況(南から)



(2) 4号横穴再利用面と玄室床面(南東から)



(1) 4号横穴再利用面と玄室床面  
(南から)



(2) 4号横穴再利用面と玄室床面  
(北西から)



(3) 4号横穴瓦出土状況(北東から)



(1) 5号横穴玄室追葬面(南東から)



(2) 5号横穴玄室初葬面(南東から)

(1) 5号横穴玄室遺物出土状況  
(北東から)



(2) 5号横穴玄室遺物出土状況  
(南東から)



(3) 5号横穴墓道遺物出土状況  
(北東から)





(1) 6号横穴玄室断面(東から)



(2) 6号横穴玄室遺物出土状況  
(東から)



(3) 6号横穴埋土断面(北西から)



(1) 6号横穴玄室全景(南東から)



(2) 7号横穴玄室全景(南東から)



(1) 7号横穴玄室断面(北東から)



(2) 8号横穴再利用面遺物出土状況  
(南から)



(3) 8号横穴墓道遺物出土状況  
(南西から)





(1) 8号横穴玄室追葬面(南東から)



(2) 8号横穴玄室初葬面(南東から)



(1) 8号横穴初葬面全景(東から)



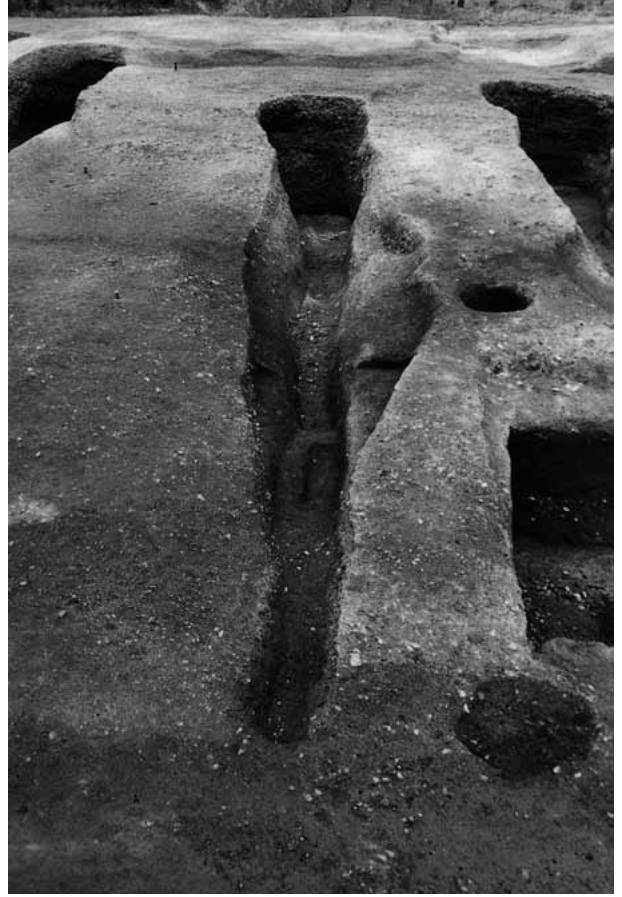
(2) 土坑S K 9 (南東から)



(3) 谷底部瓦出土状況(北西から)



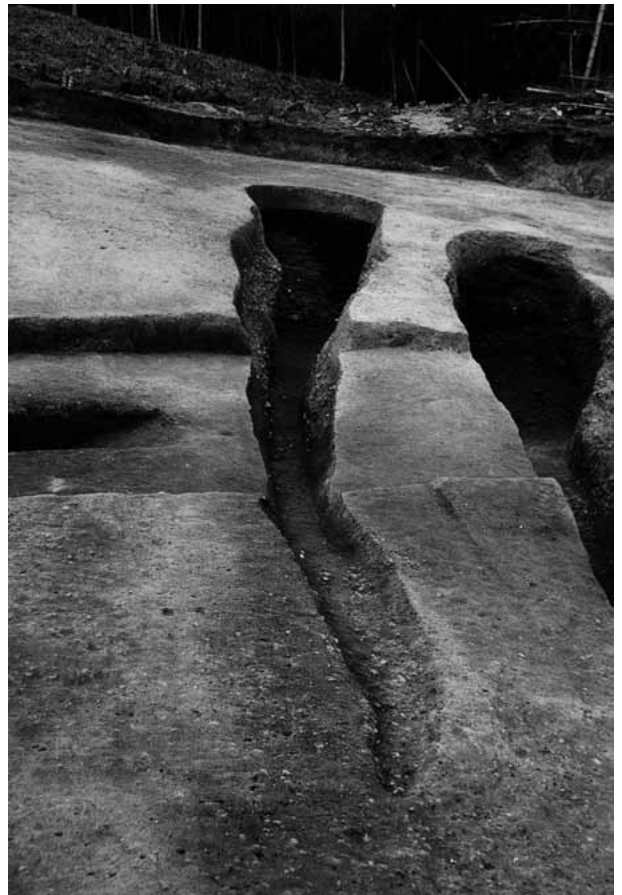
(1) 1号横穴全景(南東から)



(2) 2号横穴全景(南東から)



(3) 3号横穴全景(南東から)



(4) 4号横穴全景(南東から)



(1) 5号横穴全景(南東から)



(2) 6号横穴全景(南東から)



(3) 7号横穴全景(南東から)



(4) 8号横穴全景(南東から)



(1) 第12次調査全景(表土掘削後：南西から)



(2) 第12次調査全景(完掘後：南西から)



(1) 谷の中央部(奥が谷の入り口：南西から)



(2) 谷の断面(北東から)



出土遺物1(1号横穴:土器)

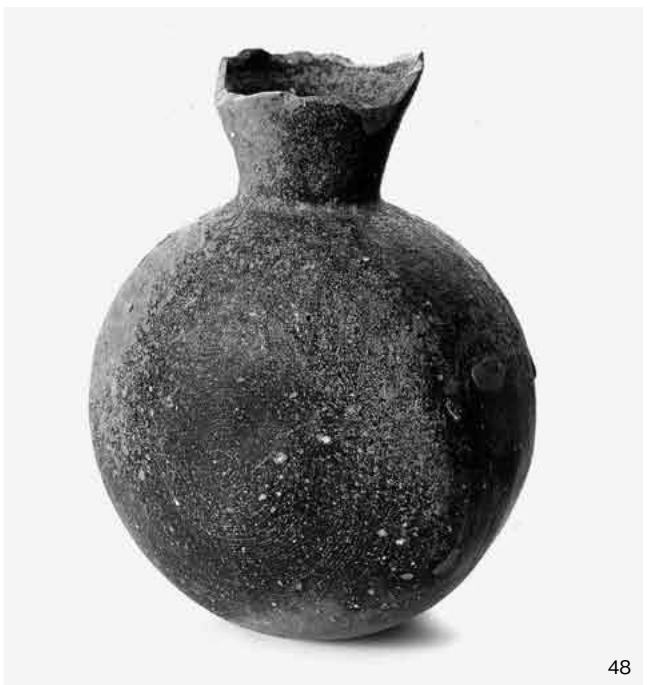


出土遺物 2 (1・2号横穴：土器)





出土遺物3(3号横穴:土器)



出土遺物4(3号横穴:土器)



出土遺物5(4号横穴:土器)



出土遺物6(4号横穴:土器)



出土遺物7(5号横穴:土器)



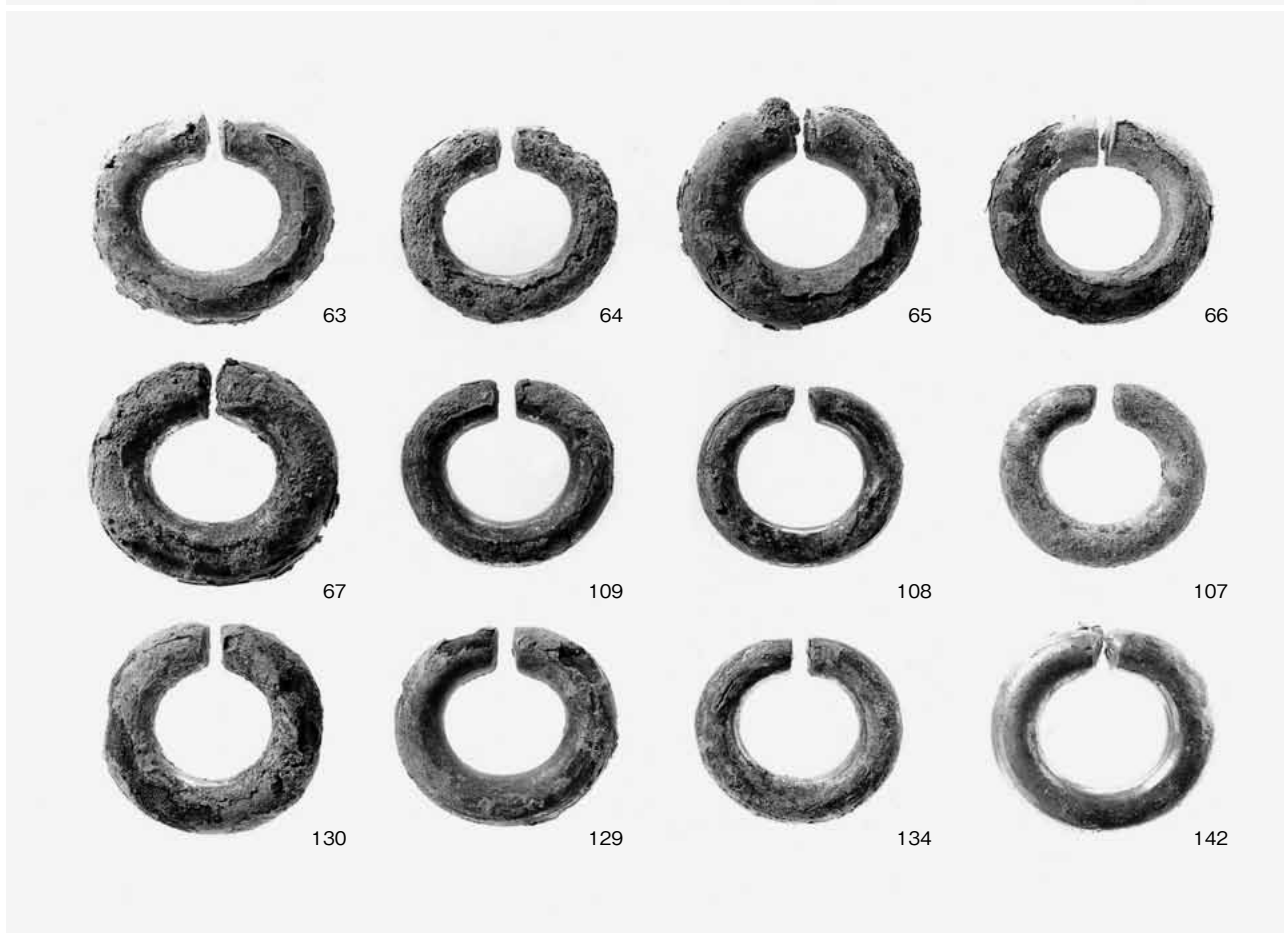
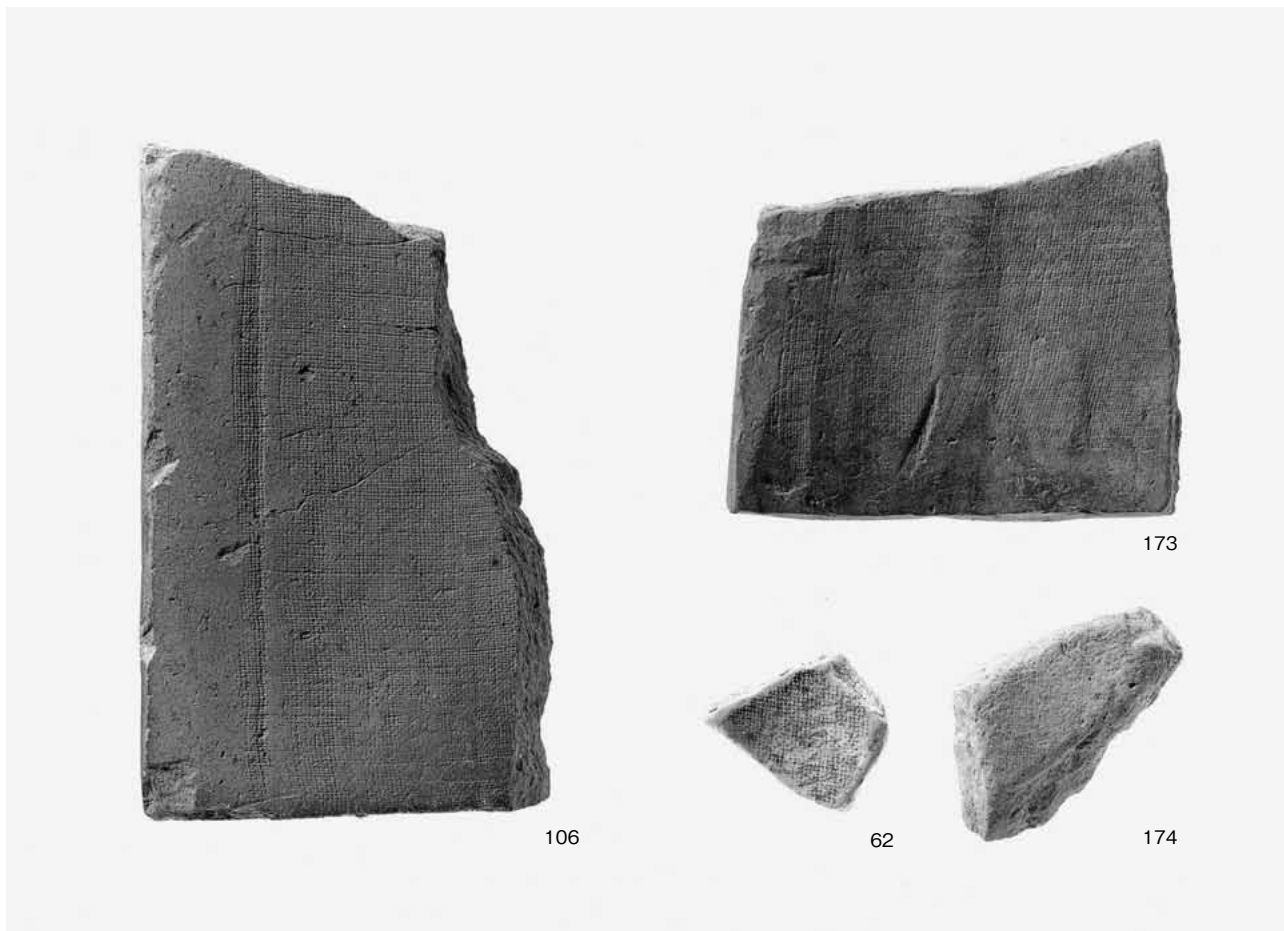
出土遺物8(5~7号横穴:土器)



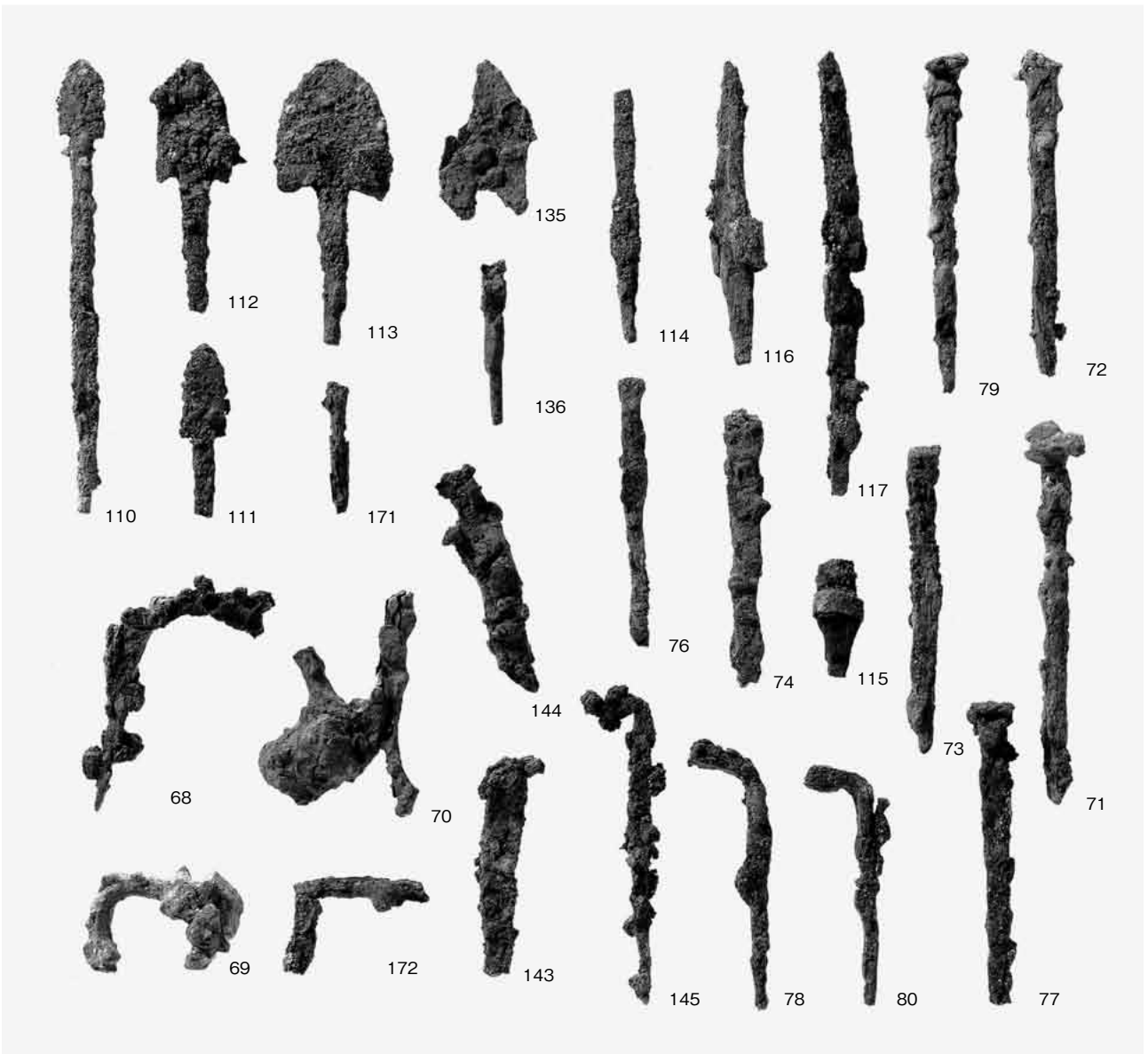
出土遺物9(8号横穴:土器・石製品)







出土遺物11(瓦・耳環)



出土遺物12(鏡・鉄製品)